
ライス・ハザード?～THE LASTWAR～

ロドリゲス 和司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライス・ハザード？～THE LAST WAR～

【Nコード】

N0952N

【作者名】

ロドリゲス and 司

【あらすじ】

コメシスとの闘いから2年、康太率いる三年三組一同はサハラ砂漠を移動していた。全ての元凶「Rウイルス」を開発した担任、袴田を仕留める為に。荒廃した世界を舞台に、終止符を打つための戦いが開始する。

プロローグ：戦いの始まり

「くそっ暑い」

額の汗を腕でぬぐいながら、康太がそう呟いた。

サハラ砂漠を三年三組は徒歩で旅をしていた。

照りつける太陽が康太達の体力を削っていく。

車のガソリンが旅の途中で切れてしまい、徒歩で移動せざるを得なかった。

「おい誰か水」

純が枯れた声でそういうと、亮太がリュックの中からペットボトルを取り出す。

「大事に飲んでよ」

亮太がそう言うのと純は軽く頷き一口分、口に含んだ。

「あれっ」

和司は何かあったのかいきなり声を出した。

「どうかしたか」

こうちゃんが尋ねる。

「何か地面が急に上がったような気がしたんだよね」

「へえ」

尚人が興味なさげに呟いた。

「暑さで頭やられっちゃったんじゃないね」

香港での戦闘の後、全世界に急激なスピードでRウイルスの被害は広がっていった。

その黒幕は、三年三組の担任、得一。

得一は、Rウイルスの被害が広がると同時に世界の大国とも渡り合える力をつけていた。

Rウイルスの恐怖から逃れるために自ら得一の下に集まる人々も大勢いる。

そして得一は、各大陸ごとにブロック分けし、今も着々と勢力を伸

ばしつつあった。

しばらく歩いていると村落らしきものを発見した。どうやら人がいるらしい。村落の近くでは子ども達も元気に遊んでいた。もう日は大分傾いていた。

「おい、こんなところに子供がいるぜ」

「さすが地元の子、元気だな」

またどうしてもよさそうに尚人がつぶやく。

「今夜はこの村に泊まろう。村長に話をつけてくる」

康太がそう言いかけたが一瞬の悲鳴によって、かき消された。全員が悲鳴が聞こえる方を振り向く。

さっきの子供が地面に引きずり込まれていた。

「おい、助けるぞ」

和磨がヌンチャクを取り出すと、すぐに子供の方へ向かう。

「待て」

和司が大声をあげて、和磨の動きを止めようとする。

「うるせえ」

和磨は無視しそのままさらにスピードを上げた、が後ろから投げられた警棒に足をとられその場に転倒してしまった。

「なにすんだよ」

和磨は、すぐに立ち上がり和司たちを睨みつけた。

その時、悲鳴が叫び声に変わった。

地面が盛り上がり、その下からRウイルスに感染した巨大サソリが姿を現した。

「ライスコーピオンだ」

康太がそう言うと同時に8人は戦闘態勢をとる。

「死ねや」

尚人が早速引き金を引き弾丸を撃ち込む。しかし体を覆っている胃に軽く跳ね返された。

「バカか、こういうのはな、覆われていない関節部分を狙うんだよ」

和司が狙いを定め、撃った。

狙い通り関節部分に命中させるが傷すらつけることができなかった。

「ウソだろ」

「デメエもバカじゃねーか」

尚人が笑いながらそう言った。

「でもちよつとマズイな」

こうちゃんが苦笑いしながら距離を取る。ライスコーピオンは狙いをこちらに付けている。

頭を狙うにも大きなハサミによって全て防がれてしまう。かなり手詰まりだ。

「誰か囧になれよ」

純がそう言うのとみんな和磨の方に視線を送る。

「ちよおつと待てや」

和磨が反論しようとするが、

「さっきの子供の敵打ちしてこい」

「大丈夫、見た所スピードはなさそうだ」

と簡単に言い負かされてしまい、囧になることが決まった。

「くそ、しっかり頼むぜ」

和磨は勢いよく突っ込む。しかし、ライスコーピオンは予想以上に素早かった。

「ヤバイ」

大きく右に飛ぶが、それとほぼ同時にライスコーピオンはハサミを振り落とした。

一瞬にして砂煙が高くまで舞い上がる。

「大丈夫か」

康太が大声で安否を確認する。

「なんとか」

思ったより普通に返事が返ってきたことに安堵の息を出す。砂煙が薄くなり、和磨の居場所を確認することができたが、その後ろでライスコーピオンハサミを構えていた。

「しまった、気づいていない」

この大事な時に声が出ない。

再びライスコープオンがハサミを振り落とす。砂煙が舞い上がり、和磨が見えなくなる。

「カズマァー」

誰かの叫び声が砂漠にむなしく残る。

「ウソだろ、おい返事しろ」

尚人が大声を出すも返事は聞こえてこない。ライスコープオンは砂に潜った。

だがどこからかエンジン音が耳に聞こえてくる。

エンジン音の聞こえる方に目を向ける。

そこには、バイクに乗った男とその男の右腕に掴まれている和磨の姿があった。

第一話：砂上の決戦

「あ、ありがとう・・・」

和磨はバイクの少年にお礼を言った。少年の顔はフルフェイスのヘルメットに覆われて誰だかわからない。少年は無言だった。

「早く、皆のところに戻らないと」

和磨は少年の腕を振りほどこうとする。しかし、少年は和磨の腕を離さない。

「何すんだよ!」

和磨はついに少年に対して怒った。少年は無言で和磨の背中を手刀で叩いた。和磨は痛みでその場にうずくまってしまった。ライスコーピオンに襲われたときに背中を怪我したのだ。

「う、うう・・・」

「今は大人しくしてろ」

少年は初めて言葉を発した。

「くそっ、和磨が死んじゃった」

尚人が残念そうに呟く。さっきまで和磨がいた場所には血痕があった。

「悲しんでいる暇は無いぞ。奴が砂に潜った」

こうちゃんが警棒を構える。砂の中は奴にとってプールみたいなものだ。どこから襲ってくるかわからない。細心の注意を払わなければ。

その時、康太の後ろから砂が噴出した。

「康太後ろ!」

健斗が警告をしたが、声を出したときには遅かった。康太は左腕をライスコーピオンに掴まれ、そのまま蠍と共に宙へ飛んだ。

「このクソさそりめが! 腕を放しやがれ!」

抵抗をするものの、ライスコーピオンの鋏む力は万力のように強い。

いや、万力以上の強さだ。人間が抵抗したくらいで放れるようなものではなかった。

「関節が駄目でも腹ならいけるはずだ」

和司は弾薬を装填し、ライスコーピオンの腹を狙った。ライスコーピオンは康太を掴んだまま地面に降りてこようとしたときである。

「今だ！」

和司は腹を目掛けて引き金を引いた。銃弾はライスコーピオンの腹に命中し、その衝撃でライスコーピオンは康太を放した。落ちた康太のもとに亮太がすぐに駆け寄る。

「大丈夫か？」

亮太は康太に聞く。

「ああ、何とか意識はあるよ。でも、左腕をひどくやられてしまった」

康太の左腕はひどい有様だった。早く治療をしないと腕を切断するはめになりそうだ。亮太は応急処置として、康太の左腕を包帯で止血した。

「じっとしてろよ」

亮太は康太の近くにすることにした。

ライスコーピオンは和司に狙いを定めた。

「やっべ、こうなった時のことを考えていなかった・・・」

和司の銃はM24SWSだ。狙撃銃では接近戦には向かない。リュックサックの中にあるものを思い浮かべてみる。あのお化け蠍を倒すのに使えそうなものは手榴弾くらいしかない。それも一発のみだ。
「くそっ、どうするかな」

和司は考えていた。あの蠍の頭に手榴弾を埋め込めば確実に倒せる。だが、そうするためには極限まで接近するしかない。

「いちかばちか」

和司はライスコーピオンに背を向けて走り始めた。

第二話…無謀な挑戦

和司は村落の方に向かって走り始めた。砂上には奴の独壇場だ。砂ではなく土が足場の所に奴を誘き寄せなくてはならない。

「純ー！ 俺を援護しろ！ 俺が蠍に飛び乗って、至近距離で手榴弾を爆発させる。その隙を作ってくれ！」

和司は叫んだ。

「了解！」

純は応答し、ライスコーピオンの後を追って行った。

和司は村落に到着すると、家の屋根に上った。村の住人は逃げ惑っている。

「あのお化け蠍の頭に手榴弾を埋め込んでやる」

和司はライスコーピオンの頭を吹き飛ばすつもりである。ライスコーピオンは体全体が胃で覆われているが、頭だけはおにぎりだ。ライスヒューマン同様、核である梅干を潰せば動きは止まると考えていた。

しかし、遠距離では頭を狙うことはできない。ぎりぎりまで近づかなければならない。既に康太は負傷し、和磨は死んだ。これ以上戦いを長引かせると不利になる。

屋根の上で待っているとライスコーピオンが近づいてきた。和司は既に手榴弾を右手に持っていた。

「今だ！」

和司は屋根から飛び出し、ライスコーピオンの背中に飛び乗った。ライスコーピオンは何かが自分の背中に乗ったことを感じ暴れだす。和司は手榴弾のピンを抜き、頭に手榴弾を埋め込もうとしたが、ライスコーピオンが暴れたため埋め込む前に手榴弾を放してしまった。「しまった」

和司はライスコーピオンから振り落とされた。手から放れた手榴弾はすぐに爆発した。和司は爆風から身を守るためライスコーピオン

の腹の下に潜った。爆発はライスコープイオンの頭を襲ったが、鋏で爆風が一部防がれ、頭を全壊させることには至らなかった。頭は半壊し、核となる梅干が半分露になっている。

ライスコープイオンは腹の下にいる異物を押しつぶそうと圧力を掛けてくる。

その時だった。

「純！」

純が援護に駆けつけたのだ。純はM4カービンを構え、ライスコープイオンの腹を狙った。

ライスコープイオンはすぐに攻撃の対象を変えた。対象はまだ砂上にいる。

「純！ 早くこっちに来い！ 砂の上には奴の思いつぼだ！」

和司に言われた通り、純は急いで村落の方に向かった。ライスコープイオンは急いで砂上に向かった。

ライスコープイオンは砂に潜り始めた。純はまだ走っている。村落まであと百メートルといったところか。

純のすぐ後ろから砂が噴出し始めた。すると、お化け蠍が姿を現した。

「純！ 後ろだ！ 避ける！」

純はすぐ後ろを見た。そこにはあのお化け蠍がいた。鋏が純に襲い掛かる。

「ここであつたばるわけにはいかないんだよ」

純はすぐさま、お化け蠍の鋏に蹴りを入れた。鋏は弾道をそらし、蠍はバランスを崩して倒れた。その隙に純は全速力で村落に走った。

やっと村落に着いた。もうこれであの蠍は砂に潜れない。純は家の中に入りM4カービンを構えた。真正面から襲ってくる蠍の頭に弾丸をぶち込んでやる。

しばらくして、ライスコープイオンは純が隠れる家に突っ込んできた。家の土壁は崩壊した。

「これでも食らえ！」

純は力の限り銃を撃った。しかし、ライスコーピオンの頭には命中せず、銃や胃に命中するだけだった。

ほどなくして、カチカチと空しい音がする。

「くそっ、ここで弾切れかよ。ついてねえなあ」

純は抵抗するのを諦めた。俺は皆の役に立てただろうか。コメシスとの決戦では戦力になっていただろうか。全く、迷惑を掛けたぜ。

皆を頼むぜ、和司。俺俊弥の所に行くよ。

家の中で血飛沫が上がった。

和司は崩落音がした方へ向かった。純は無事なのだろうか。ライスコーピオンのいる家に着いた。辺りには瓦礫が散らばっている。蠍は何かを食べているようだった。和司が近寄ると、蠍は振り返った。鋏には肉片を持ち、頭の周りが紅い。もしかして・・・

「う、うわああああ！」

和司は錯乱状態に陥った。そんなまさか、純が、純が。この憎いお化け蠍を倒すにしろ手榴弾は使ってしまった。自分の銃は狙撃用で接近しているこの状況では役に立たない。

「くそつくそが！」

和司は逃げようとしなかった。武器がないこの状況でも逃げるわけにはいかない。この仲間を殺した化け物を放っておいてはいけけないのだ。お化け蠍は鋏を振り下ろした。和司はなんとか避け、振り下ろした鋏に掴まった。そのまま、振り上げられた勢いで和司はお化け蠍の背中に着地した。和司はすぐに腰にあるナイフを引き抜いた。これで直接頭を刺してやる。

ナイフを振り下ろそうとしたその時、何者かによってナイフが銃弾で弾かれた。

銃弾が流れてきた方向をみると、そこにはバイクに乗った少年の姿があった。

第三話：犠牲の代償

和司は困惑していた。あの男が邪魔しなければ、確実に止めを刺せていた。

そんなことを思っていると、バイクがこっちに向かってくる。バイクはライスコーピオンの背に乗り上げ、男は和司の右腕を引っ張った。和司は引っ張られ、ライスコーピオンの背中から転げ落ちた。

「何をするんだ！」

和司は男に向かって怒鳴った。あと少しで止めを刺せたのを邪魔した拳句、ライスコーピオンの背中から引きずり落とすなんて。男は黙ったままだった。

男はバイクから降りると、背中に背負っていたモスバークM590を取り出し、構えた。ライスコーピオンはこっちの方を向く。銃口から火が噴き出す。銃弾はライスコーピオンの装甲に命中し、兆弾する。男は全弾撃ち終えるとモスバークM590を捨て、腰に装着してあったシグザウエルP299を構えた。ライスコーピオンは銃を振りかざし、男は銃を華麗に避けて引き金を引いた。銃弾は寸分の狂いも無く露になった梅干に命中した。

核である梅干が砕けると、ライスコーピオンは呻き声を上げ、その場に倒れる。銃と尾はだらんと垂れ下がっていた。

「あんたは何者なんだ？」

和司は男に聞いた。

「俺を忘れるとは和司もひどいなあ」

男はそう答えるとフルフェイスのヘルメットを取った。その顔は見覚えのある顔である。

「リヨ・・・スケ」

和司は驚きを隠せなかった。リヨスケは一年前のコメシスとの闘いで行方不明になっていたはずだ。どうやって俺達がいるサハラ砂漠まで来たのか。

「全くあんな無茶して悪かったな。ライセンスピオンが尾で和司を刺そうとしていたからな」

あの時銃弾でナイフを弾いたのは俺に危険が迫っていたことを知らせるためだったのか。

「今回の闘いは犠牲が大きすぎた。二人死んじまった」

和司は悲しそうに呟く。純も和磨も死ぬなんて。

「いや一人だ」

リヨスケは言った。

「どういうことだ？」

和司は涙ぐみながら聞き返した。

「純は助けられなかったが、和磨を助けることはできた」

この朗報に和司は少し救われた。和磨は生きていたのか。

「こっち着いて来な」

リヨスケの言われた通りに着いて行く。

リヨスケが立ち止まった家に入ると、家の奥にはうつ伏せになって背中に包帯を巻いた和磨の姿があった。怪我はかなり酷いが命に別状は無いようだ。

「さあ、早く皆を呼んでくるんだ。和磨はここから動かせないしな」
和司はリヨスケに言われたとおり、皆を呼びに行こうとした。

「それと純の墓を作らないといけないな」

リヨスケの一言を聞いた和司は、初めての犠牲の大きさに痛感した。

第四話：寝ろ

「ここはどこだ・・・？」

康太は目を覚ました。左腕には包帯が巻いてある。利き腕じゃなかっただけだったな。隣では和磨がうつ伏せで寝ている。どうやら背中をやられたらしい。辺りを見てみると、ここは村の家らしい。床は堅く、壁は日干しレンガでできている。畳の上で育った俺にとってはどうもこの堅い床は慣れない。

「おーい、康太が目を覚ましたぞ」

亮太が叫ぶ。すると皆が次々と俺の近くにやってきた。

「一体、俺が気を失っている間に何が起こった？」

亮太に聞いた。

「康太はお化け蠍に襲われた後、すぐに気を失った。おそらく激痛によるものだ」

亮太は答える。言われたとおりだ。まだ左腕が痛い。

「お化け蠍との戦闘中にリヨスケと再開した」

辺りを見てみる。確かにそこにはリヨスケがいた。どうやってここまで来たのか。後で詳しく話を聞こう。しかし、一人足りない。純がいない。どこへ行ったのか。

「純はどうした？」

康太は亮太に聞いた。

「純は・・・」

その続きは聞かなくてもわかった。

「そうか、わかったから言わなくていい」

犠牲を出してしまった。俺が気を失っている内に。コメシスとの闘いからここまで一人欠けることなく来たのに。今後闘いは厳しいものになるだろう。

「この宿はどうやって確保した？」

「リヨスケが村長に話をつけてきた。ここは村長の別宅で宿じゃな

い」

宿すら無いとはここはかなりの田舎のようだ。観光客が来るとは思えないような場所にあるからか。

しかしこの部屋は狭いな。せいぜい四、五畳くらいしかない。全員が泊まるのは不可能だろう。

「ここ以外に泊まる場所はあるのか？　ここじゃ全員は泊まれないな」

亮太に聞く。いろいろと聞くことが多いな。

「大丈夫。泊まれる部屋はここ以外にもあるから。細かい心配はしなくてもいいから今はとにかく寝て」

「ああ、そうするよ」

康太はまぶたを閉じた。今後の方針は明日話合えばいいか。

康太はすぐに深い眠りに就いた。

「俺も寝るか」

亮太も横になった。

皆も分かれて各自の部屋へ向かう。こうちゃん、尚人、健斗は階段下の部屋へ向かった。その向かいの部屋に和司とリヨスケが入った。

「いつまでしよげてんだよ」

リヨスケは和司に言う。和司は未だに純の死を引きずっていた。仲間の死はそうそう割り切れるものではない。

「あれはどうしようもなかっただろ」

リヨスケは和司をフォローする。あれはどうしようもなかった。そう割り切らせようとしていた。和司はまだ無言だ。

「・・・なんでそう言えるんだよ」

無言だった和司が口を開いた。その声は涙声だった。

「あれは俺のせいだ。俺の装備がしっかりしてれば純は死なずに済んだ」

和司は自分を責めていた。

「いろいろ思うことはあるだろうけど、悔やんでも純は帰ってこない。とにかく今は寝ろ」

リヨスケは床にしゃがみこみ、壁にもたれかかった。

「なんでそうやってすぐ割り切るんだよ！仲間が一人死んでんだぞ！その態度は非情すぎるだろ！」

和司の怒りが爆発した。和司はリヨスケに殴りかかろうとし、リヨスケは拳を受け止めた。

「和司の気持ちはよくわかる。俺だって悲しくないわけがない」

リヨスケは落ち着いた口調で言う。

「でも」

リヨスケが大きく息を吸い込む。

「ここでいつまでもウジウジしてたら純の死も無駄になる。乗り越えなきゃいけないんだ。俊弥の時の様に」

和司は拳を引っ込め、その場に座り込んだ。リヨスケの言うとおりだった。

「いろいろ話したいこととかあるなら明日聞くから。とにかく今は寝て疲れをとれ」

そう言って、リヨスケはまぶたを閉じた。

和司もその場で横になった。

第五話…二年前

翌朝、和司は日の出と共に目を覚ました。

カーテンも窓も無く、ただ壁に穴が空いているだけでは朝日が直接部屋に差し込む。しかし、早朝なのにもう暑い。流石砂漠地帯といったところか。

現在の時刻は午前五時。以前の自分では考えられない程早く起きた。既にリヨスケは目を覚ましているようだ。

「おはよう」

「おはよう」

挨拶を交わした。

「昨日は熱くなってごめん」

和司は謝った。昨夜はあやうくりヨスケを殴りそうになるところだった。

「いいよ、いいよ。疲れが溜まってたんだろう」

リヨスケはそう言って部屋を出ようとした所だった。

「ちょっと待って」

和司がリヨスケを引きとめた。

「どうした？」

「教えてくれないか」

「何を？」

「二年前、コメシスとの戦闘後に何があったかを。他の皆はどこいった」

和司は思い切ってリヨスケに一年前のことを聞くことにした。

「じゃ、二年前のことを話そう。コメシスとの戦闘後はお前らとは合流できなかった。負傷者も多くいたし、合流する手段も無かった。そこで俺と秋田、一将、高之、幹弘で行動することにした」

「その後は？」

和司が聞く。

「大変だったよ。康太の様な絶対的なリーダーシップを持った奴がいなかったから中々まとまらなかったしな。持ってた武器も少なかったからよく揉め合いにもなった」

リヨスケは話を続ける。

「ちょうど去年の夏だったな。俺たちはタイにいたんだ。あのときは湿度が高くジメジメしてた」

リヨスケは一呼吸置いた。

「襲撃を受けた」

「誰からだ？」

和司は質問をする。

「あれは何だったかわからねえ。少なくともライスヒューマンじゃない。イーターに近い姿だったな。そいつに攻撃され俺たちのチームは壊滅した。おそらくあいつは得一の差し金だろう。試したんだよ。試作品を」

和司は驚きを隠せなかった。得一は未だ新しい生物の開発を続けているのか。

「襲撃を受けた後はどうなった？」

「チームは壊滅。俺もその時は意識がもうろうとしていてわからなかった。とにかく自分の命を守るのが優先だった。俺は建物に身を隠してあの試作品が立ち去るのをただ待った」

「立ち去った後はどうしたんだ？」

「とりあえず、皆の無事を確かめようとしたさ。でも誰一人見つからなかった」

部屋が重い空気に包まれる。これ以上聞くのはよした方がよさそうだ。

「わかった、もうこれ以上話さなくていい」

和司はリヨスケに二年前のことを聞くのは止めた。リヨスケも仲間を失ったのか。和司は昨夜の自分の行動を少し後悔した。

「さあ、康太のいる部屋へ向かうぞ」

和司は部屋を出て、階段を上った。

「わかった、俺も行く」
リヨスケはノートパソコンでメールを送信し、その後すぐに階段を上った。

皆康太のいる部屋に集まっていた。人数が多いせいで部屋が狭く感じる。

「これからどうする？」

康太は皆に聞いた。

「得一のいる場所へ向かう」

和司が発言した。それがこの旅の目的だ。

「ここ二年間旅をしてきてRーウイルスに関する情報はゼロ。無論、開発者である得一の情報なんて手に入っていないのに？」

こうちゃんが反論する。確かにその通りだ。

「もう武器も弾薬も少ない。どこか近くの町に調達しに行こう」
健斗が提案する。ライスコーピオンとの戦いで弾薬等をかなり消費してしまった。これ以上旅を続けるのは厳しい。

「ここは砂漠地帯のど真ん中だ。近くに町なんてあるのか？」

和磨がリヨスケに聞く。

「この村から少し離れた所に大きな町がある。そこの警察署とかに行けば武器が手に入ると思う」

リヨスケは答えた。

「少し離れたってどれくらい？」

康太が聞く。

「五キロメートル」

リヨスケは平然と答えた。砂漠を五キロメートル移動なんてかなり過酷だ。ましてや日中はさらに厳しい。

「そんな、移動だけで水や食料を使うじゃないか！」

和磨が声を荒げながら言ったが、リヨスケはすぐに和磨に言い返した。

「村の人に話をつける。町までラクダで送ってくれないか、と」
リヨスケはそう言い残し、部屋を出て階段を下っていった。

しばらくすると、リヨスケが部屋に戻ってきた。

「で、話はどうだった？」

康太は聞いた。

「別に問題ないって。ただし町の近くまでならばだって」

皆その発言に良い予感はしなかった。

「なんで町の近くなんだ？」

こうちゃんがリヨスケに聞く。

「町にはライスヒューマンがいっぱいいて、町に行くのは危険すぎるからだって」

全員が黙った。Rーウイルスの感染はこんな辺境にまで来てたのだ。

「でも町に行かないと弾薬や武器は手に入らない。それに食料も直なくなる」

康太の言うとおりだ。

「行くことに賛成の人」

康太が採決を採った。すると全員が行くことに賛成だった。

「誰が行く？俺と和磨は怪我が酷いから無理だ」

康太が皆に聞いた。

その後、誰が町に行くか議論をした。

その結果、町にはこうちゃん、健斗、リヨスケが行くことになった。

町に行く三人は町へ行く準備をしていた。

「これ持ってけ」

亮太がこうちゃんに自分のベレッタM92を渡した。勿論弾薬もだ。

「ありがとう」

こうちゃんは亮太にお礼を言った。

出発は夕方だった。日中に移動するのは厳しかったからだ。

「じゃ、行ってくる」

三人は村人が用意してくれたラクダに乗って町へ向かった。

もう既に月が出ていた。

第六話…考えるんだ

「着いたか」

健斗達一行は町に着いていた。もう既に辺りは暗く、月の光が唯一の光源となっていた。

「これからどうする？ 警察署でも荒らすか？」

こうちゃんが聞いてくる。いきなり警察署を荒らすのか。

「警察署より、銃砲店とかを探したほうがいいと思う」

健斗は答える。

「じゃ、そうしよう」

健斗達は銃砲店を探すことにした。こんだけでかい町だ。銃砲店の一つや二つはあるはずだ。

しかし、望みは薄そうだ。町は荒らされ、いたる所から煙が上がっており、商店のガラスはほとんどが割られていた。パンデミックが起きた際、暴徒と化した民衆が窃盗をしたのだろう。ましてや、銃砲店なんて真っ先に狙われそうな場所だ。

「不気味なくらい静かだな」

リヨスケが呟く。

「ああ、確かにな」

健斗は手にトンファを握り締めたままだ。静かとは言え、この町には絶対ライスヒューマンがいる。

それも、大量に。

こうちゃんは懷中電灯を照らしながら歩いていた。

しばらく歩いていると、曲がり角からなにやら人が歩いてくるのが見えた。

「まさか生存者がいたのか？」

こうちゃんが人に向けて懐中電灯の明かりを向ける。すぐにそれが人じゃないとわかった。ライスヒューマンだ。

「野郎、早速出てきたか」

リヨスケは腰に装着してあるシグザウエルP299をすぐ引き抜いた。

「待て」

こうちゃんが引き金を引かせるのを止めた。

「銃声でやつらが寄ってくる可能性がある。それにこんな雑魚に弾はもったいない」

こうちゃんは警棒を構えた。それに続き健斗もトンファーを構える。ライスヒューマンは一体だけではない。先頭の一体の後ろに何十体もいる。

「俺はどうすればいい？」

近接武器を持たないリヨスケがこうちゃんに聞く。

「銃砲店を探せ。無ければ警察署だ。くれぐれも弾の無駄遣いはするなよ。あのライスヒューマンは俺達二人が食い止める」

こうちゃんがそう言うと、リヨスケはすぐに走り出した。

「さてどうするか」

健斗は臆していた。こうちゃんがかっこいいことを言ったはいいものの、あの数を相手にするのは苦勞する。米があれば奴らの気をそらせるのに。ライスヒューマンは徐々にこっちに近づいてくる。すでに米、米の大合唱が始まっていた。

選択肢は二つ。正面突破かどこかに逃げるか。

「こうちゃん、逃げよう」

健斗は逃げるほうを選択した。

「逃げるったってどこに？」

「どこか、ライスヒューマンが登ってこれない場所」

健斗は指をさした。指を差した先には大きな壁がある建物があった。

「まさか、あの壁をよじ登るとでも？」

こうちゃんは聞いてくる。

「ああ、そのまさか」

「わかった。あの建物に向かおう」

健斗とこうちゃんは建物に向かい始めた。早速、ライスヒューマンの群れを突破する必要があった。

「この道は無理じゃないか？」

健斗は立ち止まった。見ると、通路いっぱいにはライスヒューマンがいる。

「この店の二階へ行こう」

こうちゃんは店の二階へつながる階段を登った。健斗も続いて登る。「登ったはいいけどどうするんだ？」

健斗は聞く。二階へ登ってもライスヒューマンは階段を登ってくるだけだ。

「机で通路を塞ごう」

こうちゃんは机で階段の所を塞いだ。ここは飲食店らしい。健斗も机や椅子で階段を塞ぎ、バリケードを作った。

「あの建物までの道は？」

健斗はこうちゃんに聞く。町の地図があればいいのだが、そんなのを探してる暇は無い。この町に来た目的は弾薬や武器、食料の補充なのだから。

「今、それを考えてるんだよ」

こうちゃんは椅子に座り考えていた。これがまさに考える人か。

「あの建物に直進で着くことは不可能だし、まともに進んでも迷路に迷うだけ。しかも、迷路にはライスヒューマンがうようよいいる」
健斗も案を考える。ライスヒューマンに会わずに済む方法で且つ、早く行ける方法を。

このバリケードもそう長くは持たない。バリケードの向こうからは米、米と聞こえてくる。

「こうちゃん、どうする？」

「あゝ中々、良い考えが思い浮かばねー」

こうちゃんも煮詰まっていた。それもそうだ。こんなこと学校で習わなかったからな。

「それとここから出る方法はあるの？」

健斗が聞く。

「うるさいな、お前も考えろよ」

こうちゃんは大分ストレスが溜まってきた。もうバリケードは決壊寸前だ。

その時、バリケードにしていた机の山が崩れた。一斉にライスヒューマンの群れが雪崩れこんで来る。

「まずい、バリケードが崩れた！」

健斗はトンファーを持って階段の所へ向かった。階段のどこにいるやつらを倒せば二階への侵入は阻止できる。健斗はトンファーを振り回した。鋭いスイングはライスヒューマンの頭を砕いた。しかし、ライスヒューマンは一体だけではない。

「まだまだあ！」

もう片方のトンファーも振り回した。倒しても、倒してもライスヒューマンは向かってくる。

「こうちゃんも手伝ってくれ！」

「今考えてんだよ」

「そんな場合かよ！」

激しい口論になった。口論している内に、ついに二階への侵入を許してしまった。

「もうやばい、撤退するぞ」

健斗はライスヒューマンを倒すのをやめ、逃げることにした。しかし、この階に逃げ場は無い。

「こうちゃん、窓から飛び降りるんだ」

健斗は飛び降りて脱出しようとした。

「無理だ。窓の下見てみるよ」

こうちゃんに言われる通り、健斗は窓の下を覗いた。下にはライスヒューマンが集まっていた。飛び降りても噛まれるのがオチだった。「くそっ、どうするんだよ」

道が潰えたと思ったときだった。

「下が無理なら上へ行けばいいんだ」

こうちゃんに案が浮かんだ。

「それってどういうこと？」

「窓の淵を使って、屋根に上がればいい」

健斗の顔が明るくなった。ついに良い案が浮かんだか、こうちゃん。こうちゃんはすぐに窓の近くに行き、懐中電灯で窓の淵を確認した後、淵を掴み屋根へ上った。

上ると、懐中電灯で念のため屋根に敵がいないか確かめた。

「大丈夫。上はオッケーだ」

こうちゃんは手を差し伸べた。差し伸べられた手を健斗は掴み、引き上げてもらった。

窓から追ってきたライスヒューマンが二階から落ちるのを二人は見た。

「なんとか助かったな」

健斗はようやく落ち着くことができた。

第七話…あの建物へ

「呼吸は落ち着いたか？」

こうちゃんは健斗に聞いた。

「ああ、落ち着いたよ」

と、健斗は返す。健斗はこの時考えていた。ここからどうするかを。今俺達二人は屋根の上にいる。ここにいればライスヒューマンから攻撃を受けることは無い。しかし、この場にいつまでもいても進展は無い。移動しなければあの大きな壁に囲まれた建物には着かない。「ここからどうやって移動する？」

「屋根を伝って行くしかないだろ」

やはり、そうか。そうしなければ移動はできない。リスクある行動だが現状、それしか手立てがない。

「いくぞ」

こうちゃんに言われて健斗は着いてくことにした。

屋根の端に着いた。向こう側の屋根までざっと二メートルといったところだった。学校の体育の授業で走り幅跳びはやったことがあるが、下にライスヒューマンがいる練習はやったことがない。たかだか二メートルの距離を跳ぶだけなのに足がすくむ。

「ここ飛び越えるぞ」

こうちゃんに言われた。その後、こうちゃんは助走を付けるため、屋根の端から少し離れた。すると、思い切り走り始め、屋根の端で勢いよく跳んだ。そのまま、こうちゃんは空を駆け向こう岸に着いた。

「さあ、健斗も早く」

「お、おう」

どうしてあんなにこうちゃんは臆することなく跳べたのか。自分は怖くてたまらない。

「どうした、びびってないで早く来いって」

こうちゃん、せかすのはやめてくれ。

健斗は深呼吸をして息を整えた。そして、力の限り走り思い切り足を踏み切った。

なんとか向こう岸に着くことができたが、心臓がこれでもかと言うほど高鳴っている。

「ちょっと休憩」

健斗はそう言って、仰向けになった。

「なあ、健斗」

「何？」

「どうしてリヨスケは俺達の居場所がわかったんだ？」

こうちゃんに言われて、健斗ははっと気づいた。今まで気にも留めなかったが確かに疑問だ。

自分達とリヨスケは別に連絡を取り合ったわけではない。

和磨の話によると、ライスコーピオンに襲われたとき、助けてくれたらしい。

なぜリヨスケは自分達の危機に駆けつけることができたのか。

「確かにそうだね。別に俺ら連絡したわけでもないのに」

「そこが疑問なんだよな。なんで連絡なしでここまで来れたのか」
こうちゃんも疑問に持ってたらしい。いや、おそらく皆疑問に持っているだろう。ライスコーピオンとの戦闘後忙しすぎて、そんな話を聞きだす暇が無かった。

「GPS機能を使ったとかは？」

健斗はこうちゃんに聞いてみる。

「確かにその線が濃いかもな」

こうちゃんは考えながら言った。

「あと衛星写真を使ってたのもあるかもね。俺達堂々と移動してたし」

健斗が第二の考えを挙げる。人工衛星からの衛星写真を使えば地上

のものは、十センチ四方まで確認できる。リヨスケはノートパソコンを持っていた。この可能性は高いだろう。

「今のところ、その可能性が一番高いな」

こうちゃんはそう言って立ち上がった。

「そろそろ休憩は辞めて動くか。夜が明ける前にあの建物までに着かないといけないからな」

「よし行こう」

健斗も立ち上がり、荷物を背負った。ここからしばらく走り幅跳びで移動しなければならない。

徐々に走り幅跳びも一種のスリルに変わりつつあった。慣れというのは恐ろしい。

そのころリヨスケは弾薬を探すため銃砲店の中にいた。店内は案の定、荒らされている。銃弾が見つかる望みは薄そうだ。幸い、ライスヒューマンには会っていない。健斗達が引き付けてくれているからだろうか。

「ここも脈無しと」

独り言を言いながら銃砲店の店内を歩き回る。ショウケースは割られ、飾ってある銃も無くなっていた。

試しに、店のカウンターのところも調べてみた。

望みは無いだろうな、と思いながら引き出しの奥を探してみる。

何か堅いものが手に当たる感触がした。

銃弾だ。

ようやく銃弾を見つけることができた。

銃弾は散弾だった。自分のもっているモスバークM590の弾と同じだった。

見つかった弾は八発。そんなに多くはない。

もう少し探してみることにした。今度は店の奥に回ってみたが、こもひどい荒れようだった。倉庫にあるはずである武器は何も無か

った。戸棚の中を確認してみる。

またあった。今度は拳銃とマガジンが見つかった。マガジンは拳銃の中にあるのと予備が二つあった。

リヨスケは拳銃を腰に装着し、マガジンをポーチにしまった。

「そろそろ建物に向かうか」

リヨスケは銃砲店を後にした。

第八話…多勢に無勢

健斗とこうちゃんは例の建物の前に来ていた。扉は堅く閉ざされ、強固な壁が建物の周りを囲んでいる。

「ここからどうやって中に入ろうか」

健斗は考える。今自分達は民家の上におり、壁の向こうに行くにはここから降りなければならぬ。

しかし、下にはおびただしい数のライスヒューマンがいる。ここから降りて且つ、ライスヒューマンの群れを蹴散らしながら扉へ向かう必要があった。

「ワイヤーを使ってここから降りるぞ」

こうちゃんは自分のリュックサックの中からワイヤーを取り出すと、ワイヤーを手すりに引っ掛け、もう一端を健斗の腰に括りつけた。

「これはどういこと？」

健斗はこうちゃんに聞いた。まさか、これを命綱にしてここから降りるってことか。

「健斗が一番最初に降りて活路を作ってくれ。その後俺もワイヤーを伝って降りるから」

「俺が第一走者ってことか」

降りると言っても下にはライスヒューマンがいて、地面に降り立つ前に噛まれてしまう。健斗は自分の腰にある手榴弾を取り出した。

ラスト一発の。

すぐさまピンを抜き、下に放り投げた。耳を塞ぎたくなるような爆音がし、足の踏み場ができた。

健斗は壁を伝って下りはじめ、健斗の近くにライスヒューマンは寄ってくる。

「今だ」

健斗は思い切り壁を蹴って、ライスヒューマンのいないところに着地した。地面は焼き焦げていた。

健斗はトンファアを構え、寄ってくるライスヒューマンを殴り飛ばした。腰についてあるワイヤーが邪魔だがこれが無いとこうちゃんは降りてこれず、余計不利になる。

トンファアはライスヒューマンの頭目掛けて振り下ろされる。ライスヒューマンの頭部は碎け散り、辺りには米が散らばった。次々とライスヒューマンは寄ってくる。

いちいちライスヒューマンの頭部を碎いては埒が明かないと思い、健斗はライスヒューマンの足を狙うようになった。足払いでライスヒューマンを倒し、一方でトンファアで胸を強打する。ライスヒューマンはその度によろめき、倒れるが再び立ち上がり襲ってくる。

「この底なしの体力めが」

健斗の息も切れかけてきた。倒すだけ進めない。健斗はまだ焼き焦げた地面の上にいた。

援軍が欲しい

そう思いながら健斗は近づいてくるライスヒューマンの足を払っていた。

こうちゃんは今、ワイヤーを伝って下りているところだ。あともう少しでちよつと楽になる

健斗が疲労で一瞬ふらついたときだった。

ライスヒューマンが健斗の上に覆いかぶさろうとしていた。もう、健斗にライスヒューマンを追い払う体力は残っていない。

ここまでか

そう思ったときだった。

覆いかぶさろうとしたライスヒューマンの頭部が碎け、ライスヒューマンが力なく倒れていった。

「こうちゃん」

目の前には警棒を持ったこうちゃんがいた。

「遅れてわるかったな。ワイヤーを伝って下りるのは怖くてな」

俺はそれを最初にやったんだ。

健斗は気力で立ち上がった。あと少しなら頑張れる。こうちゃんが来た今、自分は一人でこの群れを相手にする必要は無い。

こうちゃんは二本持った警棒を巧みに扱い、ライスヒューマンの頭をカチ割っていった。

次々と魂が抜けたようにライスヒューマンは倒れていく。

健斗も気力を振り絞ってライスヒューマンを倒していった。

二人ですると仕事はやはり早く、扉の前に着いた。

この強固な扉から入るのは不可能だったので、横の職員用のものと思われる扉から入ることにした。

扉を背にすれば襲ってくるライスヒューマンは前方のものだけだ。ここで二人はある単純な問題に気づいた。

どうやってこの扉をあけるのか

とびらには南京錠がしてあり、素手であけるのは不可能だ。

ましてや合鍵なんてない。

「こうちゃん、どうやってこの扉を開ける？」

枯れそうな声で聞いた。

「銃でこの南京錠を壊す。ここに来る前に亮太から拳銃をもらった」銃で南京錠を壊すのは名案だった。

しかし、一つ問題点があった。

銃を構えて撃つ間、ライスヒューマンを一人で相手にしなければならぬこと。さらにこうちゃんを守りながら。

残念だが自分にその元気は残っていない。自分の身を守るのでせいっぱいだ。

遠くから銃声がした

銃声は何度も続く。音はどんどん自分に近づいてくる。

そこにはM4カービンを携えたリヨスケの姿があった。

ライスヒューマンの死体を踏みつけながらこっちに近づいてくる。

気がつけば、自分の近くにいるライスヒューマンはほとんど倒れていた。

「リヨ、リヨスケ」

いいところに来てくれた。

「こうちゃん、早く錠前を」

こうちゃんは銃を構え引き金を引いた。カーンと銃弾が金属に当た
る音がして錠前は壊れた。

三人は扉を開けると中へ入っていった。

「扉を閉めない」と

健斗は忘れずに扉を閉めた。

第九話：試作品

壁の向こうは何かの施設らしかった。

犯人輸送車両やジープが立ち並んでいた。

奥には鉄筋コンクリートで作られた建物があり、窓には鉄格子が取り付けてある。

刑務所だろうか。

そんなことを思いながら健斗達は歩いていた。

「とりあえず、建物の中に入るぞ」

こうちゃんの提案により三人は建物に入ることにした。

扉には何もロックは無かった。おそらく取り壊されることになったのだらう。

「おじゃまします」

と言いながらリヨスケは入った。二人もそれに続くようにして入った。

建物の中には幅広い廊下があり、廊下の横にはいくつもの小部屋があった。

小部屋には粗末なベッドと便器がある。

中々不気味な場所だ。陽光が差し込んでる分まだマシか。

「ここに入ったはいいいけどどうする」

こうちゃんが聞く。

「まずは、武器庫を探すのが優先でしょ。ここは刑務所っぽいから銃火器も備えてあるはず」

銃を磨きながらリヨスケが答えた。

「じゃ、まずそうするか」

三人はムシヨの中を歩いた。

しばらく歩いてると分かれ道になった。このまま真っ直ぐ進むか階

段を上るか。

「どっちへ行く」

再びこうちゃんが聞いてきた。

「二手に分かれるのは？」

健斗は答えた。

「二手に分かれるとなると、二人と一人か。一人は危険じゃないか？」

こうちゃんの言うとおりで。ここの内部の構造がわからない以上、単独行動は危険だ。

「じゃ、三人で行動するか」

リヨスケがそう言ったときだった。壁がガラガラと崩れる音がした。

「何かいるのか？」

リヨスケがすぐにM4カービンを構えた。

「建物が老朽化して崩れたんだろう」

こうちゃんのその一言を皆は信じてしまった。

「だ、だよな」

「で、どうする？」

「とりあえず、皆で階段を上るか」

健斗達は階段を上ることにした。

階段を上るとそこには再び廊下があった。しかし、小部屋は少なくなっていた。

少し廊下を歩くと今までの部屋とは雰囲気が違う部屋が一つあった。

「この部屋に入るか」

こうちゃんはドアノブに手をかけた。

ガチャッと音がして扉は開いた。鍵はしてなかったようだ。

部屋の中にはコンピュータ機器が多く存在し、病院にあるような手術用のベッドが一つあった。

試しにコンピュータの電源を押してみるが電源が入らない。
当然か。

でも、コンピュータはそこまで古くない。つい最近まで使っていたのか。

コンピュータの横には本棚があり、そこには数多くの書籍が埃をかぶっていた。

試しに書籍の一つを手にとってみるが、書籍は英字で書かれており読めない。

「ここは何の部屋なんだ」

こうちゃんがふと疑問を言う。

「もしかして、ここは得一の研究所の一つなんじゃないか」

リヨスケの発言に二人は目を丸くした。

「いや、その可能性もあるかもねってことだよ」

リヨスケは慌ててフオローした。

確かにリヨスケの推測があつてるかもしれない。

刑務所になぜ病院用のベッドがある？

刑務所内にだつて看守や囚人を診るために病院はある。

でも、ただの病院にしては設備がよすぎる。

それとも、刑務所の病院はこんなに設備が良いものなのだろうか。

いろいろと思索をしていると、再びガラガラと壁が崩れる音がした。崩落音がしたかと思うと、何かが近づいてくる足音もした。

「絶対何かいる」

リヨスケはM4カービンを携え外に出ると、すぐにリヨスケは青い顔をして部屋に戻ってきた。

「やつがいる」

リヨスケはガタガタと震えだした。

「やつってなんだよ」

健斗はトンファーを構えて外に出た。

そこには見たこともない生物の姿があつた。

頭はおにぎりで、筋骨隆々に鍛え上げられた姿。イーターにものす

ごい筋肉が付いたと言ったらこんなだろう。足音からしてかなりの重量だ。

「あ、あの時の・・・」

リヨスケが音を漏らした。

「あの時のって？」

健斗が聞く。

「二年前のあの時の試作品だ」

リヨスケの声色は明らかに悪い。二年前リヨスケの部隊を壊滅させた張本人の姿が目の前にいるのだから。

「あいつには敵わないから早く逃げろ」

リヨスケは部屋を飛び出し廊下を駆け出した。

獲物が逃げるのを試作品は見逃さなかった。

仁王立ちをしていた試作品は走り出した。足音は重く、禍々しいオーラを放っていた。

このままだと試作品はリヨスケを捕らえる前にまず、健斗を吹き飛ばそうとしていた。

「ここはどうしてたまるか」

健斗はトンファーを構え試作品の動きを止めようとしたが、試作品の体重は健斗では止めきれぬ程重かった。健斗は反射的に身を翻した。

「お前はリヨスケと一緒に武器庫を探せ」

こうちゃんは警棒を取り出して、試作品の背中に飛び乗った。

こうちゃんはすぐに警棒で試作品の腕を思い切り強打した。すると、試作品はバランスを失いそのまま滑りこみ倒れた。こうちゃんは試作品の背中から降り、試作品は立ち上がった。

「この怪物は俺が足止めしとくからリヨスケと一緒に行け」

健斗はトンファーを肩に背負いリヨスケの後を追った。

第十話：迫りくる豪腕

「かっこいいこと言ったはいいけど、どうしようか・・・」
こうちゃんは目の前にいる怪物を見て思った。

誰かがこいつを止めなければならぬ。リヨスケだと精神面上不安だし、健斗と俺かと言われたら、俺のほうが適任だろう。

こうちゃんは警棒を握り直し構える。試作品はこちらに近づいてくると腕を振り上げた。

「あれに当たったら終わりだ」

こうちゃんは急いで前転をして避けた。試作品の拳はコンクリートの床にめり込む。なんて力だ。

こうちゃんはリヨスケと健斗が逃げた方向と反対方向へ走り出した。なるべく長く時間稼ぎをするために。試作品はこうちゃんの走った方向へと向かった。

幸いなことに、あの怪物はイーター程素早くない。

そんなことを思いながら長い廊下を走った。

試作品は素早さは無いものの、体力はある。

このままじゃ、捕まる。

こうちゃんは小部屋の扉を開けて中へ逃げ込んだ。ここなら入り口は一つだ。迎え撃てる。

警棒を構えたその時だった。

試作品は扉から入ってこずに、扉の横の壁を破壊して入ってきたのだ。

この狭い部屋には逃げ道は無い。そろそろ闘うか。
試作品は体当たりをかましてきた。

こうちゃんは壁を蹴り、三角跳びの要領で攻撃を避けた。

ガラガラという轟音と共に向こうの部屋が露になった。

試作品が振り返ろうとしたとき、こうちゃんは試作品の膝の裏を警棒で強打した。すると、試作品は一瞬よろめいた。

「膝はつかなかったか」

こうちゃんは舌打ちをして、すぐに次の攻撃にかかる。試作品がこつちを振り向く前に頭を破壊しようとし、力を込めて頭部を打った。しかし、そのダメージはこちらに来了。

「く…」

あまりの痛みに思わず警棒を手から離した。これが作用反作用か。左手の感覚がいまいち無い。しばらくは持てそうにないな。

こうちゃんはとりあえず、落とした警棒を回収しようとした。

その時だった。

試作品の肘打ちが当たるところだった。あそこで警棒を拾おうとしてたら、自分の身体は粉々になってただろう。粉々になった警棒を見てそう思った。

こうちゃんは右手に持ったもう一つの警棒を腰にしまい、穴の空いた壁を通って、向こうの部屋へ向かった。

向こうの部屋を通り、廊下へ出たこうちゃんは階段のある方向へ向かった。

やつに追いつく前に上の階へ行ってしまうばこっちのものだ。

走っていると何かが空を切る音がした。自分の前の壁には人の頭ほどの大きさがある瓦礫が転がっていた。あの野郎こんなもの投げやがって。

急いで階段を上がろうとすると、再び試作品は瓦礫を投げてきた。

またしても瓦礫はこうちゃんには命中しなかったが、瓦礫の破片が当たった。

瓦礫には目もくれず階段を駆け上がった。

階段を駆け上がると目の前に大きな扉があった。その横には再び廊下が続いている。

こうちゃんは目の前の扉を開けた。

そこには数多くの長机が置いてあった。

作業場か。

こうちゃんはひとまず長机の影に隠れた。

これで少しは落ち着ける。自分の息がかなり荒くなってるのに初めて気がついた。

「警棒を一本失ったか」

ほとんど感覚の無い左手をみて思った。あの野郎はとんでもない石頭だったな。米で出来てるとは思えない程の。奴の弱点はおそらく頭だ。しかし、その頭そのものがものすごく堅い。

しばらく息を潜めていると、試作品は部屋に入ってきた。

第十一話…ヒーロー

試作品は部屋に入ってくると辺りを見回した。

俺のことを探しているらしい。

俺の居場所を見つけるのにはそんなに時間は掛からなかった。

試作品は長机を蹴り飛ばしながらこちらに近づいてくる。休ませてもくれないのか。

右腰にしまった警棒を取り出し構える。試作品はすぐさま体当たりを仕掛けてきた。

俺は右に跳んで攻撃をかわす。辺りには長机の破片と思しきものが散乱している。

「いい考えが思いついたぜ」

俺が試作品の懷に潜ると、試作品は俺に狙いを定めて拳を振り下ろした。走って拳を避ける。床のコンクリートにはひびが入る。

「この調子だ」

試作品は俺目掛けて何度も拳を振り下ろし、そのたびに俺は避ける。

このまま、床を殴り続ければいい。

徐々に床のヒビは大きくなっていく。

パキッとコンクリートの破片が碎ける音がした時だった

「そろそろ離れるか」

こうちゃんは試作品の傍を離れた。

試作品が足を一步踏み出すと突然床が抜け落ち、試作品は下の階へと落ちていった。

「本体が強いなら、そいつの足場を崩せってことだ」

倒れた試作品を見下ろしながらこうちゃんは呟いた。

まだ試作品の意識はある。油断してはならない。

試作品はゆっくり立ち上がり、こうちゃんがいる上を見た。

すると、試作品は大きく跳びあがり、再び舞い戻ってきた。

「やっぱりこいつと闘うのかよ」

試作品は腕を振るい、こうちゃんはそれを華麗に避ける。大きな穴を床に空けたせいで足場が悪くなった。

すぐさま、右脚に装着してあるベレッタM92を引き抜き、試作品の左足を狙い撃った。

銃弾は筋肉のついた脚を貫いたが、たいしたダメージにはなっていない。

「拳銃くらいじゃビクともしないようだな」

ベレッタM92を右脚のホルダーにしまい、警棒を構えた。

試作品が風を切るような速さで、こちらに拳をぶつけてきた。

「危ねえ！」

とつさに警棒を振り払い、拳の軌道を逸らした。その拍子にこうちゃんは試作品の腕に掴まり、放り投げられて試作品の背中に乗った。試作品の背中から床は中々の高さだ。

ざっと二メートルはあるだろう。

試作品は一生懸命こうちゃんを振り落とそうとした。

こうちゃんは試作品の首に掴まり振り落とされまいとした。

そうやっているとき試作品は足場を踏み外し、再び下の階へ落下した。無論こうちゃんと一緒に。

落下した試作品はうつ伏せになるようにして倒れ、その上にこうちゃんが馬乗りになっているような状態だった。

これはチャンスだ。

しかし、止めを刺すような武器がない。

そう思っていると、何やら話し声が聞こえてきた。足音も近づいてくる。

その足音の主は扉を開けた。

リヨスケと健斗だった。

「こうちゃん」

リヨスケが話しかけようとする。

「話はいいいから後だ。その銃をこっちに投げろ」

リヨスケは持っていたモスバーグM590をこうちゃんに向かって投げた。こうちゃんは右手で受け止め、試作品の頭に突きつけた。

「くたばれ筋肉おにぎり」

引き金を引くと、頭部の米粒が飛び散り、中から紫蘇が噴出した。試作品の身体がビクンと痙攣すると、その身体は二度と動かないかのようにグッタリしていた。

「いいところに来てくれたな」

「ヒーローは遅れて来るもんだろ」

リヨスケは自慢げに言った。

第十二話：新たなる手がかり（前書き）

今回ちょっと長いです。

第十二話…新たなる手がかり

こうちゃんはリヨスケにモスバークM590を返した。

「武器庫は見つかった？」

「ああ、見つかったよ。弾薬も銃も結構な量がある」
リヨスケは答える。ここで補充ができるのは大きい。

「武器庫の近くに災害用倉庫もあったから未開封の缶詰やレトルト食品、救急セット、医薬品とかも補充できるよ」

健斗が情報を付け足す。

「じゃ、行こうか」

三人は武器庫へ向かい始めた。

武器庫には想像以上の銃や弾薬があった。こんだけあればしばらくは弾をケチらずに闘える。

しかし、疑問が一つあった。

ここは刑務所だ。軍の施設では無い。こんなにも銃火器は必要なのだろうか。それとも刑務所は元々銃火器を多く備蓄してるのか。

いずれにせよ、ここでの補充は心強い。はるばる来た甲斐があった。

「災害用倉庫にあった食料とかここに出しとくよ」

健斗が倉庫にあった缶詰や医薬品を外に廊下に出していた。食料も結構な量だ。ここ最近、食料をケチりながら行動してたから、これは皆喜ぶな。絶対。

「こんだけあるのはいいけど、ここからどうやって運び出そうか」

「護送車両に乗せて行くのは？」

健斗が案を挙げた。

「確かによさそうだな」

「いや、ダメだろ」

リヨスケは健斗の意見を否定した。

「なんでだよ」

健斗が食ってかかった。

「刑務所の堀の外にはライスヒューマンがうようよいるんだぞ。今もここに入ろうとしている。誰が門の扉を開けるんだ？ それに車でライスヒューマンを轢きながら進むのは無理だ。血と脂で滑って転倒しやすくなる」

リヨスケの言うとおりだ。今俺達がこうやって話している間もライスヒューマンは門を叩いてる。既に刑務所の周りには何千体ものライスヒューマンがいるに違いない。

「じゃ、どうするんだよ」

健斗は自分の意見を否定され少し怒ってるようだ。

「それについては案があるから大丈夫だ。それより興味深いものがあった」

リヨスケは武器庫を出て階段を上がっていった。

「興味深いものって何だよ？ ちょっと待ってよ」

健斗はリヨスケの後を追いつ、俺も向かった。

リヨスケの入った部屋にはデスクトップのパソコンが一台机に置いてあった。部屋にはソファとベッドがあり、窓からは刑務所の外が一望できた。ここは最上階らしい。

リヨスケはパソコンの電源を点け、画面を開いた。

「驚いたよ、まさかこんながあるとはな」

「健斗とリヨスケは一緒に行動してなかったのか？」

「途中までは行動してたけど、途中からはリヨスケが調べ物があると言って別行動になった」

パソコンにはメールボックスの画面が開かれていた。

「こ、これは・・・」

俺はメールに書かれている内容が信じられなかった。

メールは日本語でやり取りされていたのだ。英語ではなく。日本人がここにいたってことになる。それか、日本語の使える外国人のどちらかが。

メールにはこのように記されていた

「こんにちは、直そちらへ向かいます 2011. 7. 10」

2011年の7月となると今から三ヶ月前くらいか、ということとは三ヶ月前には誰かがここにいたということになる。刑務所の中が思っていたよりも汚くないのはそういうことだったのか。

「メールの宛先は誰かわからないのか？」

俺はリヨスケに聞いた。宛先がわかればここに誰がいたのかがわかってくる。

「アドレスだけじゃわからん。差出人も誰かは知らん」

「ただ」

「ただ？」

二人の声が重なった。

「情報は少しだけあった」

リヨスケはマウスを動かしてファイルを開いた。

俺と健斗は声が出なかった。

そこには、あの試作品の画像があったのだ。

頭はおにぎりで筋骨隆々な姿、イーターに似たあの雰囲気。

画像の隅にはこう記してあった。

「Eater EX-06」

やはりイーターの改良型のようなだった。

「なんでこの画像がこんなところにあるの？」

健斗が指摘した。

「俺の推測だと、この刑務所は得一が持つ研究所の一つとして機能してたってことだ。三ヶ月前まではな」

リヨスケの言ってることで間違いないようだ。この施設は得一の配

下にあった。しかし、何らかの理由で廃棄された。だから、過剰とも思えるくらいの銃や弾薬があったのか。

「ここが得一の配下の研究所である可能性は非常に高いな。他にまだ情報は無い？」

俺はリヨスケにさらなる情報を求めた。

「もう一つだけ情報がある。これだ」

リヨスケはフォルダをさらに開くと、画面に世界地図が出てきた。世界地図には各大陸ごとに丸で印がつけられていた。アメリカ合衆国北部と中部、ブラジル、オーストラリア、タイ、中国北京、ウクライナ、日本、そしてここリビア。

「この丸印は・・・」

健斗は続ける言葉が出てこない。

「多分、得一の研究所があるところだろう。リビアについてるのはおそらくここを指している」

これは俺なりの推測だ。

まだ不可解な所があった。

一つだけ丸ではなくバツ印がついてあるところがあった。

「そのバツ印は一体何？」

健斗も疑問に思っていた。

そのバツ印はおおよそ地中海を指していた。

「そのバツ印辺り拡大できない？」

俺はリヨスケに頼んでみる。

リヨスケはバツ印辺りを拡大してくれた。少しずつバツ印がどこを指してるのかわかってきた。

バツ印は小さな島を指しているのがわかった。

その島の名前は

「Elba」

「エルバ島…」

三人とも驚きを隠せない。エルバ島にも得一の研究所があるのか。それとも別の施設が。

「このバツ印が何を示すのかはわからない。でも、他の丸印と違うのはわかる」

リヨスケも驚いていた。

「このデータをノートパソコンに入れといてくれ」
俺はリヨスケに頼んだ。

「ああ」

とだけリヨスケは返事をした。

第十三話…大丈夫さ

康太は学校に到着した。午前七時五十分。チャイムが鳴るのは八時二十分だから余裕を持つての登校だ。

下駄箱に靴を入れて上履きに履き替えた。下駄箱には誰もいなかった。誰とも会わないとは中々珍しい。

階段を上がって三年三組の教室へ向かい、廊下を歩く。三年三組は一番奥の教室だ。

途中にある一組や二組の教室の中を見るが誰もいない。

ちよっと来るのが早かったかな。

そんなことを思いながら歩いてると三組の教室に着いた。

なんか教室が臭い。

この臭いは鉄か。

血だ、血の臭いがする。しかも強烈な。

前の席を見ると血だらけの俊弥の姿があった。

おい、俊弥どうしたんだよ

急いで俊弥の首筋に指を当てる。

脈が無い

一気に血の気が引くのがわかる。目をそらして床を見るとそこには白衣姿の宗磨と衛が倒れていた。

目を見開き口をぽかんと開け、首筋には獣に噛まれたかのような傷跡があった。

康太は自分の身体が一瞬ふらつくのがわかった。

貧血だ

陸上部の身なのに貧血とは思えないと思ったが、今回は別だ。気分が悪いのを我慢して前へ進んだ。

教卓の上には誰かの右腕があった。

今度はバラバラ殺人かよ

目を落してみると、教壇の上には右腕の無い山本の姿があった。

よく見ると左足も無い。

吐き気が来るのがわかった。

苦い胃液を飲み込み、吐くのをこらえて教壇から教室を見渡した。

そこには見るも無残な光景があった。

壁には血まみれの純が寄りかかっており、その近くには亮太が倒れていた。

亮太だけではなく、和司、こうちゃん、健斗、和磨、リョスケ、そして尚人も倒れていた。

康太は今自分の目の前で起こっていることを理解できなかった。いや、信じたくなかった。

キンコンカンコンとチャイムの音が鳴る。席に着く気にはなれなかった。

「さ、もう朝のショート始まるから席着けよー」
聞き慣れたあいつの声がする。

得一だ

「なに康太やってんだ、早く席着けよー」

得一は足元の山本には目もくれず教壇の上に立った。

おい得一、これはどういうことだ

そう言おうとした時だった。

得一はスーツの内ポケットから拳銃を取り出し、銃口を康太に向けた。

「これで皆の所に行けるな」

銃の引き金に指をかけようとした所だった。

「うわあああ！」

康太は目を覚まし、飛び起きた。辺りはまだ暗く、夜明けには少し

早かった。冷や汗が酷いのがわかる。心拍数が上がってるのもわかる。

「おい、いきなりどうしたんだよ」

隣で寝ていた和磨も目を覚ました。

「まだ、おはようにしては早…」

そう言いかけた時、康太は和磨の服の袖を掴み、顔を伏せて泣いた。

「よかった、夢だったか…」

そうだあれは悪い夢だったんだ、よかった。別に悲しいわけでもない、嬉しいわけでもない。なのに、涙が止まらない。

「いきなり、泣いてどうしたんだよ…」

「わarii、悪夢を見たんだ」

康太は和磨の袖を離し、窓の外を見た。砂漠の月はきれいだ。

健斗達は無事なのだろうか

それだけが気がかりだった。まだ出発から一日ぐらいいしか経ってない。あの悪夢を見た後だとよけいに心配だ。

「あいつらは無事かな」

「大丈夫さ。三人いるんだ」

和磨の言葉を聞いて、康太は再び横になった。もう少し寝れそうだ。

そのころ、こうちゃん達は施設の外を出ていた。施設の裏口近くには運びだした銃や食料が置いてあった。

「なあ、リヨスケ：案ってこれか？」

こうちゃんは目の前にある航空機を指差した。その航空機は翼にローターが付いており、大きさは結構なものだった。

「そうだ。これを操縦する」

リヨスケは何事も問題なさそうに言った。

「これってさ、俺知ってるよ。この航空機」

「ああ、ティルトローター機だろ」

リヨスケはこれが操縦できるのか。少し疑問だな。

「とりあえず、荷物中に入れるの手伝ってよ」

健斗が弾薬を運びながら言う。

「ああ、手伝うよ」

こうちゃんとリヨスケは荷物をこのテイルローター機に入れるのを手伝った。

しばらくすると荷物の搬入が完了した。

「リヨスケが操縦するの、これ？」

健斗がリヨスケに聞いた。やはり疑問に持つらしい。和磨でさえこれは操縦したこと無いのに。

「ああ、大丈夫だ。操縦できる」

リヨスケは自信を持って言った。

「二年間俺は一人で生きてきた時に習得したんだ。退役軍人に教わってな」

リヨスケは操縦席に乗り込んだ。

「こうちゃんは助手席、健斗は後ろに乗ってくれ」

そう言われると、二人は指示に従った。

「じゃ、準備はいいな？」

リヨスケはこうちゃんと健斗に声を掛け、二人はうなずいた。

「じゃ出発するぞ」

機体は徐々に浮き上がり、空を飛んだ。下にある刑務所はどんどん小さくなっていく。

「皆のところに戻るぞ」

三人は刑務所を後にし、皆がいる村へ向かった。

第十四話…手荒な目覚まし

尚人は外に出ていた。辺りはそろそろ日が昇ろうとしていた。砂漠は昼は暑くても夜は冷える。

今はちよつと冷えるが過ごしやすい。走るのには最適だ。

「今日もひとつ走りするか」

ストレッチをしながらそんなことを呟く。尚人はこの二年間欠かさずに朝の走りこみはやっていた。

いつかまた走れるときが来るのを信じて。

ストレッチも終わり走ろうとしたときだった。村の外に何か航空機が降りようとするのが見えた。

遠くからでよく見えないがヘリではないのは確かだ。少し見てくるか。

尚人は航空機が着陸した方へと走っていった。

「あの航空機は一体何？」

独り言を呟きながら走る。もしかして、こうちゃん達が戻ってきたのか。でもあのメンバーの中に航空機を操縦できるのはいたかな？和磨ならできるかもしれないけど。

航空機が着陸したのをはつきりと見えた。段々と航空機の形がはっきりと見えてきた。

ローターのようなものが翼に付いており、例えるなら飛行機とヘリコプターを足して二で割ったような形。そんな印象を受けた。

靴の中に砂が入るのを気にしながら、尚人は着陸した航空機に近づいた。

「お前らは誰だ？」

尚人は操縦席に向けて声を発した。すると、操縦席から見慣れた顔が出てきた。

「リヨスケ」

リヨスケは操縦席から降りてきた。続いて、こうちゃん、健斗も。

「無事帰ってきたぞ」

こうちゃんは伸びをしながら言った。

「怪我は？」

尚人が聞く。

「皆無事だ。弾薬や食料も大量に持ってきたよ」

尚人はすぐに航空機の貨物室を覗いた。言われた通り大量の弾薬や食料があった。

「すぐに皆に知らせて。すごい情報が手に入ったと」

こうちゃんに言われると尚人は急いで村へ戻っていった。

尚人は皆が泊まっている村長の別宅に着いた。一人一人起こすのは面倒だけどやるしかないか。

まずは和司から

尚人は和司の寝てる部屋に入った。相変わらず和司はすごい体勢で寝ていた。

「寝相悪すぎだろ」

和司を起こすのは後にするか。自分が寝てた部屋には誰もいないから、上の階の連中を起こすとしよう。

尚人は階段を上がって部屋に入った。二階には康太、和磨、亮太が寝ている。康太は誰かが入ってきたのに気づいたようで目を覚ました。と、いつてもまだ瞬きを繰り返してる。

和磨と亮太は熟睡のようだ。まずは半分起きてる康太から起こそう。

「康太ー、起きろ」

康太の身体を揺すって起こす。康太は寝ぼけながら上半身を起こした。

「おはよう」

まだ目がしっかり開いてない。

「こうちゃん達が帰ってきた。健斗もリヨスケも無事だ」

尚人は康太に事実を伝えた。

「ああ、よかった」

康太の半分寝てる頭でも理解できたらしく、康太は和磨と亮太を起こした。

「亮太、和磨起きろ」

二人とも起きるのは結構早かった。

「三人とも無事だったのか」

和磨も安心していた。

上の階は皆起こした。さっさと下の階で寝てる和司を起こさないと。尚人は階段を下りて和司の寝てる部屋へ向かった。それに続いて康太たちも階段を下りていった。

和司はまだ目を覚まさない。大の字になって爆睡している。

「おい、起きろ」

尚人が揺すってみるも起きる気配が無い。

「あと、十分」

寝ぼけた声で答える。

「これは起こすのは骨が折れそうだな」

亮太は自分のポケットから洗濯ばさみを取り出した。そしてそれを和司の鼻に挟んだ。

絶叫が響き渡った

「痛い、痛い、痛い！」

和司が痛みで叫びだす。

「これで目が覚めたな」

亮太は和司の鼻に挟んだ洗濯ばさみを取った。ようやく絶叫が収まり和司も目を覚ました。

「なんちゅー、手荒な目覚ましだよ」

和司が文句を言う。

「そんなことより、こうちゃん達が帰ってきたぞ。健斗もリヨスケも無事だ」

尚人は和司に伝える。

「おお、それはよかった」

和司も無事を喜んでいた。

皆起こし終わると、こうちゃん達が家に入ってきた。

「ただいま」

「おかえり」

その言葉のやりとりに伝えたいことは詰まっていた。

「俺達の無事を祝う前に聞いてもらいたいことがある」
こうちゃんが皆に向かって言った。

「聞いてもらいたいことって？」

康太が聞き返す。

「すごい情報を手に入れた。得一に関することだ」
一気に皆の顔が深刻になった。

第十五話…バツ印

「得一に関する情報？」

康太はこうちゃんに聞く。まさか、ここで得一の情報を得られるとは思ってもよらなかった。この二年間旅をしても手に入らなかった情報。

「ここで話すより上で話そう」

こうちゃんの提案により、皆上へ上がっていった。

「得一に関する情報を話す前にまずは良いニュースを話すか」

こうちゃんは口を開き、皆それを聞こうとする。こうちゃんは息を大きく吸い込み発した。

「食料や弾薬が大量に手に入ったってことと、航空機という移動手段を手に入れた」

歓喜の声が沸きあがった。特に食料が手に入ったのは大きい。ここ最近食料をケチりながら行動してたからだ。やはり「腹が減っては戦はできぬ」は本当のことってとこか。

「得一に関する情報はリヨスケの口から話してもらおう」

こうちゃんに話を振られ、リヨスケはノートパソコンを取り出した。「俺とこうちゃん、健斗は弾薬を手に入れるため刑務所に入ったんだ。そこで新型のイーターに襲われた」

「新型のイーター？」

和司が質問する。

「ああ、これだ」

リヨスケはノートパソコンのファイルを開きその画像を見せた。画像は確かにイーターに近かった。でも、従来のイーターとは全然違う。イーターにしてはやけに筋肉質過ぎる。

「この画像はどこから…」

亮太も聞いてくる。

「それだよ。この画像は刑務所のパソコンの中に入っていた。ご丁寧にな。ただの刑務所にこんな画像が入ってるわけがない。考えられることは一つ」

皆リヨスケと同じことを考えていた。

「俺達が入った刑務所は得一の研究所の一部だったんだよ」

皆衝撃の事実に驚きを隠せない。まさか、ここまで得一の支配下に置かれていたなんて。

「それだけじゃない」

リヨスケはパソコンを操作して新たなファイルを開いた。そこには世界地図が広がっており、丸で印がつけてあった。

「丸がつけてある場所はアメリカ合衆国に二箇所、ブラジル、オーストラリア、タイ、中国、ウクライナ、日本、そしてここリビアだ」
康太はその丸印を見て考えていた。リビアに付いてるのはリヨスケ達が行った刑務所のことだろう。日本に付いてるのは新潟にあった研究所か、中学校の古墳下にあった所のどっちかだ。

「それってつまり…」

康太が言いかけた所でリヨスケは言葉を遮った。

「ああ、多分この丸印は得一の研究所だろう」

「得一の野郎、いくつ研究所を持ってるんだ」

和磨が少し怒り気味に言う。研究所が多いってことはそれだけ資金も人もあるってことになる。

「でも」

亮太が世界地図に指を指す。

「このバツ印は何？地中海辺りを指してるけど」

亮太の指先にはバツ印があった。他の場所は丸印なのにそこだけバツ印。他の所とは明らかに違う何かがあるってことだ。問題はそこに何があるかってことだ。

「バツ印か…」

康太は呟く。

「そこがもしかしたら本拠地なんじゃないか？」

皆康太の問題発言に目を丸くする。

「おいおい、その発想はいくらなんでも唐突じゃないか？」

和司が反論する。確かにこの発想は突拍子も無い。何の根拠もない。

「ああ、確かに唐突だな。でも、廃棄されたリビアの研究所には丸印。このことからバツ印は別に廃棄された所を指してるわけじゃない」

「なんか：妙に的を射てるな」

亮太は康太の意見に共感していた。

「言われてみれば確かにそうだな。ここにいてもしょうがないからそこが次の目的地にしようぜ」

和司が折れ、皆康太の意見に賛成した。

バツ印は本拠地を指してるという意見に。

「和司の言うとおりだな。そのバツ印に向かう準備をしよう」

康太が皆を仕切った。リヨスケからの情報は大きく状況を動かす。

「こうちゃん、移動手段って？」

「ティルトローター機だ」

ティルトローター機。どっかで聞いた名前だ。まあ、いい。早く準備をしてお世話になった村長にお礼を言わないと。

「皆出発の準備だ」

康太が掛け声を掛ける。

「おう」

各自自分の荷物をまとめる準備をした。

康太は村長に会いに行くと、村長は笑顔で迎えてくれた。

「どうもお世話になりました」

康太はお礼を言う。村長もお礼を言ってるようだが、何を言ってるのかはわからなかった。感謝の意が伝わればいいか。

「全員いるな、忘れ物無い？」

康太が皆に聞いた。

「遠足に行くわけじゃないんだからさ」

和磨が突っ込む。皆、ティルトローター機に乗り込み始める。

「運転は俺がやる。助手席には和磨が着いてくれ」

リヨスケが操縦席に着き、その隣に和磨が着く。太陽は容赦なく照り付けていた。

「よし、いくぞ！」

リヨスケがエンジンを掛けると、ティルトローター機は離陸し始めた。どんどん、下の砂地が小さくなってく。

「リヨスケ、バツ印の場所ってどこだ？」

康太がリヨスケに聞く。

「エルバ島だ」

リヨスケは真剣な眼差しで正面だけ向いて答えた。

エルバ島。ナポレオン流刑の地だ。

第十六話…流刑の地

エルバ島が見えてきた。

辺りの海は鮮やかなマリンブルーに染まっている。ここに観光目的で来てたら良いなと思う。

テイルローター機は砂浜に着陸地点を定め降下する。

ローターの風圧でビーチの砂が舞い、パラソルが飛んでいく。

普段ならこの島は観光客で賑わっているが、人っ子一人いない。

そう、『ライス・ハザード』が起こるまでは。

航空機は無事着陸に成功し、降りる準備を皆してる。

「ここに得一がいるといいんだけどね」

尚人が皮肉っぽく言う。

バツ印が何をさしてるかわからない以上、そんな気分にもなるだろう。

「得一の情報が手に入っただけでも儲けもんだろう」

こうちゃんがフォローする。

「とりあえず、機内から出るか」

和司が銃を担いで外へ出ると、尚人もこうちゃんも外へ出た。

「じゃ俺も出るか」

康太はシグザウエルP226を手に取り外へ出た。この左腕が使えないから、あまり大きな武器は携行できないのが残念だ。

外へ出てみると、皆武器を持ち待っていてくれた。

「康太、どっから探す？」

こうちゃんが聞いてきた。孤島とはいえ、エルバ島はかなり広い。全部しらみつぶしに散策しようとなると丸一日くらいはかかるだろう。車を使えばの話だが。

「こーゆーのは島で一番高いところへ行けばいいんじゃない？」

和司が適当なところを言う。確かに和司の言うことも一理ある。港に置くよりは高い所に本部を置いたほうが外的からの攻撃に対処もしやすい。

「あの得一がそんな単純な所に本部を構えるかな？」

亮太が疑問に持った。高い所に置くよりは、目立たない所に置いたほうがいいかもしれない。

「じゃ、どこに置くんだよ？」

和司が亮太に反論する。

「そりゃ目立たない所だよ。島の地下とか」

亮太も同じように反論する。地下も考慮すると丸一日掛けても見つかりそうに無い。

「とにかく、まずは島の頂上目指して島の全貌を掴むことにしよう」
悩んだ挙句、康太達は島の頂上を目指すことにした。悩んでいても始まらない。

「それにしても、敵から攻撃を俺達受けてないな」

健斗がふと呟く。普通、見知らぬ航空機が島に近づいたら撃ち落とそうとするだろう。でも、俺達は着陸して且つ機内から出てきても狙撃が無い。もしかしてここは本当の無人島であるバツ印はダミーなのではないかという疑問も浮かび上がってきた。

「言われてみればそうだな。普通攻撃がありそうなんだけど。もしかしたら俺達を殺せない理由でもあるのかな？」

リヨスケが何気なく言う。殺せない理由。それが何なのか疑問が残るけどな。

「ま、頂上いけばわかるら」

尚人が尻ポケットに弾薬を入れると島の頂上へ向かった。

「じゃ、出発しよう」

皆出発し始めた。

銃を前に構えながら島を徒歩で移動するものの、人はおろかライスヒューマンすら出てこない。もしかして得一がこの島に本部を構える際、島の住民を追い出したのか。

街はがらんとしているが思ったよりは荒れてない。街の通りは石でできており、通りにはヨーロッパ調の建物が並んでいる。建物はクリーム色だったり、白だったりといういろろだ。二年前はここも観光客で賑わってただろう。

「ここに二年前に来たかったな」

康太が呟く。

「だな」

和司も呟いた。

「ここまで静寂だと不気味すぎるな」

和磨が不安気に言う。

「いや、そうでもないな」

と健斗が言うと、その目線の先には犬が五匹程こちらに近寄ってきた。

犬じゃなく、ライストッグが。

「さっそくお出迎えか」

ライストッグがこっちに走ってくると、和磨はメリケンサックをはめ直し、走ってくる一匹のライストッグの顔を殴り飛ばした。

殴り飛ばされたライストッグはすぐに体勢を立て直した。

「五匹ばかり怖くないぜ！」

健斗はトンファアを振り回しながら突っ込んでいき、振り回されたトンファアはライストッグの前足に当たった。

ライストッグ達は狙いを和磨と健斗に狙いを定め、和磨と健斗は背中合わせでライストッグと対峙した。

「助っ人は欲しいか？」

和磨が言う。

「俺達二人で十分だ」

健斗が答えると、一匹のライストッグが牙を剥き襲いかかってきた。

健斗はライズドッグを蹴り飛ばすと、そのまま髪入れずにトンフアーでライズドッグの頭を粉々に砕いた。

仲間が犠牲になり、一瞬ひるんだ隙を和磨は見逃さなかった。和磨はひるんだライズドッグの頭部をアッパーカットで吹き飛ばした。頭の無くなったライズドッグはその場に倒れた。

残った三匹のライズドッグは二人から距離をとった。

「何を考えてるんだか」

健斗は腰につけたホルスターからデザートイーグルを取り出し、一体に向ける。

「もっと仲間を呼んでくるんだな」

引き金を引くとライズドッグは地に伏し、生き残った二匹は逃げていった。

「よし」

健斗はデザートイーグルをホルスターにしまった。

「おお、すごいすごい」

二人の闘いを見ていた和司達が感嘆の声を漏らした。

第十七話：Long time no see

「なんだこれ？」

康太はライスドッグの骸に付いている機械の様な物に目が行った。その機械は筒状で先端にレンズが付いている。

「カメラか」

康太は機械を持って呟いた。

「カメラ？なんでそんなものがライスドッグに取り付けてあるんだ？」

こうちゃんが疑問に思った。

「このワンコロが自分で付けれるわけ無いからな、誰かが付けたんだろう」

和司が言う。

「誰かって？」

健斗が和司に聞いた。

「そりゃ、一人しかないだろ」

和司が言いかけた時だった。

「得一だ」

リョスケが和司の言葉を遮って発言した。

「つーことは、ここに得一がいるってことになるら」

尚人が述べる。

「だな。でも、まだ絶対じゃない」

康太の不安の色は濃くなってきた。

ライスドッグが送られてきた、となると誰かが俺達を監視していることになる。

向こうもライスドッグ五匹ごときで全員殺せるとは考えてないだろう。

なら、なぜライスドッグを送ってきたのか。

謎は深まるばかりだ。

「とにかく、一番高い所を目指そう。ここに得一がいる筋が強くなってきた」

康太は先陣切って歩き始め、皆もそれについて行った。

「ビンゴだな」

康太の目の前には大きな洋館が建っていた。

エルバ島の雰囲気にとぐわないうような建物が。

洋館の周囲は柵で囲んであるが、特に仕掛けらしいものは見当たらない。

「なんだか、新潟にあった洋館にそっくりだな」

和司が言葉を漏らす。

「警備の兵もない、有刺鉄線みたいな柵もない。まるで、入ってくださいと言わんばかりだな」

和磨の言うとおりで。本拠地にしては警備が薄すぎる。いや、この島自体の警備が薄い。

「正面から突っ込むのは危険すぎるから、俺と尚人は別行動するよ」和司の提案により、二つに分かれることになった。一度の攻撃で全滅を防ぐためにも良い方法だ。

「二人で大丈夫？」

亮太が心配をする。

「大丈夫だら」

尚人が樂觀的に答える。

「そっちに数が少なすぎると、見つかったとき怪しまれるからね。別経路で進入した奴がいるって」

和司の意見は的を射ていた。

「じゃ、そういうことで」

尚人は和司と共に来た道を少し下り、別路地に入っていた。

「玄関以外に入り口は無いかな？」

康太が皆に聞いた。できれば正面突破は避けたい。

「この洋館は柵でぐるっと囲んでいるから、裏口みたいなのは無さそうだよ」

洋館の周囲を見てきたリヨスケが言う。柵を登るのは少々リスクが高い。

「素直に正目突破しようぜ！」

こうちゃんが門を開け、敷地内に侵入しようとした。

「待て待て待て！」

和磨が急いで止めた。

「こういうのは、一度確かめてから行くんだよ」

和磨がポケットに入っていた缶詰の缶を前に放り投げ、カリーンと缶が転がる音がした。

特に射撃音も爆発音も聞こえてこなかった。

「敷地内に物を投げ入れても怒らないとは優しい管理人だなあ」

亮太が感服したように言う。

「じゃ、入りますか」

康太は一步敷地内に足を踏み入れる。なんだかんだ言って正面突破か。

「地雷は無そうだな」

リヨスケも足を踏み入れた。不安になること言うなよ。

「じゃ、俺も」

こうちゃんまでも敷地内に入ると、残りの皆も続々と足を踏み入れた。

康太達は洋館の建物内にまで侵入した。

建物内は床に大理石が敷かれており、ステンドグラスがはめ込んであった。

「中々、豪華な作りだな」

和磨が中を見て言う。

「新潟の研究所より贅沢だな」
皮肉を和司が言う。

その時だった

突然、豪勢なステンドグラスが碎け散り、床の大理石が持ち上がったかと思うと、数多くの兵士が侵攻してきた。

兵士は全員フルフェイスのヘルメットを装着しており、服装は特殊部隊の格好をしていた。当然、銃も装備している。

「やはり、罠だったか」

すぐに康太がシグザウエルP226を腰のホルスターから引き抜き、応戦しようとする。他の皆も各自、武器を取り応戦しようとする。

しかし、ほどなくして反撃の手は止まった。

「動くな」

放送が入った。この声はどこかで聞いたことがある。

「動くなって言われて止まるかよ」

和磨が放送には気にも留めず動こうとしたのを、康太が急いで止めた。

「とりあえず、ここは向こうの指示に従え」

康太が和磨に耳打ちした。和磨の目線の先には、こめかみに拳銃を突きつけられたリヨスケの姿があった。

「わかった、動かないから撃つな」

康太は手に持っていたシグザウエルP226を床に落とし、両手を挙げた。他の皆も持っていた銃を床に置き、両手を挙げた。

「流石、康太。物わかりがいいね」

癪に障る声が聞こえてくる。壁の一部が開くと、その声の主は現れた。

「やはり、ここだったか」

こうちゃんが舌打ちをする。

「久しぶりだね。教え子達よ」

目の前には「ライス・ハザード」の張本人、得一の姿があった。

十八話：弔い

「得一……！」

拳を握りながら和磨はそう言った。

「ここで下手に動くとリヨスケが死ぬぞ」

康太は和磨を必死になだめた。人質がいる以上、向こうが有利だ。おまけにこちらは武器を持ってない。

「なんだよお前ら、久しぶりの再会だぞ」

得一がおちよくるかのように言葉を発する。この状況をどうにかして打破しなければならぬ。

「そういえば、和司と尚人がいないな。どうしたんだ？」

得一が質問をしてくる。とっさに、

「二人は死んだ。旅の途中でな」

と康太はとっさに嘘をついた。

「なんだ、死んだのか。短い生涯だったね」

こんな状況で無いならお前をぶん殴ってやりたい。相変わらず、リヨスケのこめかみには拳銃を突きつけられたままだ。

「こっちはもう、闘いの意思は無い。リヨスケを開放してもらおうか」

康太が交渉に応じた。

「開放？ なんのことだか」

得一がとぼけたかのように発言した。

「得一、てめえ……」

こうちゃんが得一を殴ろうと一歩踏み出した時だった。

「リヨスケ、やれ」

得一の命令によって、こめかみに突きつけられていた銃はどけられ、リヨスケは腰のホルスターから拳銃を取り出し、こうちゃんの左足に向けて発砲した。こうちゃんは悲痛の叫びを上げてその場に倒れこんだ。

「リヨスケ：てめえは…裏切るのか…」

瀕死の状態でこうちゃんは声を絞り出した。

「止めを刺せ」

その得一の一言でリヨスケはこうちゃんの頭に向けて発砲した。こうちゃんがビクンと身体が跳ね上がったかと思うと、紅い液体が流れ出てきた。

「リヨスケ、お前どういことだ！」

健斗は怒りを抑え切れなかった。

「お前ら気がつかなかったのか」

得一はただそう言った。

「考えてみる。十代のガキにサハラ砂漠を横断してる仲間を見つけれれると思うか？ 敵のアジトの本部まで何の襲撃も無く無事辿りつけると思うか？」

得一の言うとおり、確におかしかった節があった。この島に入ってから襲撃されたのは洋館に着いてからだった。

「リヨスケからの連絡でお前らの行動は筒抜けだったがな。ここまですよう誘導してくれたよ」

「リヨスケが得一に頭を垂れたのはいつからだ？」

康太が質問をした。

「二年前、リヨスケ達のグループを襲撃したときだ。どいつもこいつも死に損ないだったが、リヨスケだけ息があった」

康太は黙って聞いている。得一が深く息を吸い込んだ。

「リヨスケに交渉したんだよ。お前の命は助けてやるから、三年三組の残りを実験台として俺に提供しろとな」

「そしたらな、リヨスケは首を縦に振ったんだよ。そこからだ。リヨスケの体力が回復したら様々な訓練を施した。武道、語学、武器の扱い…」

康太は得一の発言に少々疑問を持った。実験台：だからこの特殊部隊も俺達をすぐに殺さないのか。

「リヨスケは再会したときからグルだったってことか」

和磨が怒りを殺しながら言った。

「なぜ、俺達を実験台にするんだ？ 人間なら誰でもいいんじゃないのか？」

康太はさらに質問をした。

「君達が優秀だからだよ。＞ライス・ハザードくが起こった時も冷静に対処して、日本からの脱出を図った。ただの中学生がだ。さらに訓練もしていないのに、銃火器を手足のように使いこなす。俺の最高傑作のメシスも倒した」

得一はさらに話を続ける。

「もうね、君達はねただの中学生じゃないんだよ。才能を持ち合わせてる。平凡な人間じゃ実験にならないんだよ」

こいつはイカれてやがる。マッドサイエンティストか。

「あと、俺の素性を知ってるやつがいるといういろいろ迷惑なんだよ。

今、＞ライス・ハザードく的首謀者は正体不明になってる。けどな、お前らがいると首謀者がばれちまう。世界は既に半壊してるけど、FBIとかは犯人をまだ追っている」

皆驚きの色を隠せなかった。こんなイカれ野郎が担任だった事実。

「リヨスケの役割はここまで俺達を誘導するってことか」

亮太が呟く。

「そう。君達はまんま騙されたってことだ。さ、こっちに来るんだ」
得一はリヨスケを自分の身の近くに寄せ、特殊部隊は康太たちの手を縄で縛りつけようとした。

その時、天井の排気口のふたが外れた。特殊部隊はとっさに銃口を排気口へ向けた。

「ねじがゆるんだのか」

得一はあまり気に留めなかった。

だが突然、特殊部隊の一人が銃を乱射し始めた。銃弾は他の特殊部隊に命中し、次々と人が倒れていく。

「何が起こったんだ？」

康太達も突然の出来事に驚き、銃を乱射した特殊部隊員はヘルメットを取り外した。

「ここまで予測通りだ」

その正体は和司だった。

「くそっ、ずっと大人しくしてたか」

得一は舌打ちをすると、リョスケを連れて通路の向こうへ消えていった。

「得一を追うぞ！」

健斗は得一を追っていった。すると、死に損なった特殊部隊員が通路の前に立ちはだかった。

特殊部隊員は銃口を健斗へ向けたが、すぐに銃口はだらりと下がりその場に倒れた。

「尚人……」

尚人が手に持ったダガーで特殊部隊員の首筋を刺したのだ。

「よこったね、別行動する人間がいて」

尚人はダガーを腰にしまい、健斗と共に後を追った。

「このまま、追うぞ」

和司、亮太、和磨も後を追って行った。

「死者への弔いはするべきだな」

康太は力尽きたこうちゃんのまぶたをそっと閉じさせた。

第十九話…実験開始

康太は考えていた。

得一は何故リヨスケを使ったのか。

ただ俺達を捕獲するのが目的ならばリヨスケを使う必要は無い。特殊部隊の連中に捕獲させればいい。

人工衛星を使えば俺達がどこにいるかはすぐわかる。

何故リヨスケを生かしておいたのか。

それが疑問だ。

康太は先頭の尚人に追いついた。陸上で鍛えた足の速さは伊達じゃない。

「得一はどこ消えた？」

「さあ。ここまで一本道だから、このまま走ればいいら」

尚人がそう答えた直後、康太達の後ろから赤い線が出るのが見えた。

「やばい、止まれ！」

走っていた和司は突然急ブレーキをかけた。和司が止まったのにつられて和磨と亮太も止まり始めた。

「なんで急に止まるんだよ」

転んだ和磨が怒りながら言うのと、赤い線は次々と壁から出てきて、網を形成し始めた。

「レーザーか。このまま走っていたらサイコロステーキになってたな」

和司の言葉に和磨はぞっとした。

「まずい、分断された」

康太たちは康太と尚人と健斗、和司と亮太と和磨に分断された。

「俺達は構わずに得一を追え」

和司は康太達を先へ行かせようとした。

「お前らはどうするんだよ？」と健斗が聞くと、

「大丈夫だ。何とかする」と和司が答えた。

「何とかするって何するんだよ？」

「いいから得一を追え。相手の本拠地である以上、俺達に不利だ。向こうが体勢を立て直す前に得一を仕留めろ」

和司が一喝した。

「和司の言うとおりだ。行こう」

康太が健斗にそう声をかけると、健斗はレーザーの網に背を向けた。

「死ぬなよ」

健斗はそう一言言い残して、歩き始めた。

「八方塞がりだな」

和司達は取り残されてしまった。

曲がり角の向こうからは防護服に身を包んだ人が複数歩いてくるのが見えた。

「前方はレーザー、後方は研究員……ここまでか」

亮太が力無さ気に呟いた。

「さっきの話からすると俺達は実験台らしい。少なくともすぐには殺されないだろう」

そう和磨は言うが内心殺されるのではないかと恐れているのが感じ取れた。

研究員は銃を和司達に向けた。

「手を挙げろ」

どすの利いた声で研究員が言う。防護服は全身を包んでおり顔はよくわからない。

とにかく、ここは言うとおりにした方がよさそうだ。

和司達は黙って手を挙げた。

「付いて来い」

手を挙げたまま和司達は連行された。

「いいから入れ」

和司達は研究員に乱暴に部屋へ入れられた。

部屋の壁は白で統一され部屋の中には何も無い。

ガチャンと錠を掛けられた音がした。

「ったく、もう少し丁寧に扱えや」

和磨が研究員の扱い方に文句を言う。

「しかし、何もないな」

部屋の様子を見て亮太が言う。

「あいつら何で武器を取り上げなかったんだ？」

和司が疑問に思った。抵抗できる術をなぜ残しておいたのかが疑問に残る。

「良い所に気が付いたね」

部屋に放送が入る。

「この声は…得一か」

怒りを露にしながら和磨が言う。

「君達から武器を取り上げなかったのはこれから闘ってもらうからだよ」

そう放送が入ると、床の一部が開き中から大きなガラス管が競り上がってきた。

ガラス管の中には胎児のように何かがうずくまっている。

「まさか、こいつと闘うためか？ そんな培養液の中にいる生物に俺達の相手ができるんですか？」

和司が挑発してみせた。

「流石にこいつ一体じゃ未だ不完全だから無理だね」

放送が流れると今度は壁の一部が開き、一メートル四方の檻と、それよりも大きなコンテナボックスが現れた。コンテナボックスの中は見えないが檻の中にはライズドッグが一匹いるのが見える。

「こいつらで時間稼ぎするでしょう」

そう言い残して放送は途切れた。コンテナボックスの中が開くと中からイーターが飛び出してきた。

それに続けて檻の格子を食い破りライズドッグも出てきた。

「なにやら雰囲気が今までのとやけに違う」

和磨の言うとおりで。ライズドッグからもイーターからも禍々しい空気が感じ取れた。

「まずはこいつらが相手か」

和司はモスバードM590の弾を装填し始め、亮太もベレッタM92の弾を装填した。

第二十話…引き裂かれる仲間

ライズドッグとイーターはこちらの様子を伺っている。すぐに飛び掛らないところを見ると、知能は上がっているようだ。

「攻めてこないならこっちからいかせてもらおうぞ」

和司は銃の引き金を引き、銃弾が解き放たれる。

イーターは和司が引き金を引いたのとはほぼ同時に、飛び上がった。

「明らかに素早くなってやがる」

和司はすぐに飛び上がったイーターに照準を合わせた。空中では身動きは取れまい。

引き金に指を掛ける前に、イーターは舌を伸ばし、舌は弾丸のような速さで和司の左肩を掠った。

思わず、和司は銃を放し左肩を抑えた。貫通しなかっただけマシか。

「和司、大丈夫か！」

亮太は和司の心配をする。

「俺のことはいい！ それよりもライズドッグを相手にしろ！」

和司が叫んだ直後、ライズドッグが亮太に牙を向いた。

「っ危ねえ」

間一髪の所で亮太はライズドッグの胴体を蹴り上げた。ライズドッグはバランスを崩すが、すぐに体勢を立て直した。

「護衛とやらは二人にまかせるとするか」

和磨はメリケンサックをはめ直し、叩き割ろうとガラス管に走った。

「培養液の中でしか生きてけないのに俺らの相手なんか…」

和磨がそう言いかけた時だった。まだ殴りもしないのにガラス管にヒビが入ったのだ。ガラス管の中にいる胎児の様にうずくまった生物は目を覚まし、ガラス管を叩き割った。

ガラスが割れて“その生物”は出てきた。辺りには漏れ出した培養液が拡がっている。

“その生物”は立ち上がり、向かってきた和磨を腕で弾き飛ばした。

「な…」

和磨は受身を取り、すぐに体勢を立て直した。

「なんだよ、あの生き物は」

イーターと交戦中の和司も視線をそちらへ向けた。“その生物”は体長二メートルは優に越え、鋭利な爪が生え、手足には棘が連なり、頭はおにぎりだった。

「また得一は趣味悪いもん造ったか。こちらとてコメシスを倒したんだ」

和磨は“その生物”に立ち向かっていった。

「頭を破壊すれば死ぬんだろ！」

和磨は跳躍し拳を振り上げたが、“その生物”は和磨の振り上げた腕を掴んだ。

「まずい、和磨が！」

和司は銃口を“その生物”に向けた。

イーターはその隙を見逃さなかった。イーターは再び舌を弾丸の如く伸ばし、舌は和司の左肩を貫通した。すぐに和司の重心が崩れ、銃を地に落とす。伸ばされた舌は今度は鞭の様にしなやかになり、和司の身体に巻きつき、拘束した。

「この気色悪い舌を放しやがれ」

舌を引き剥がそうとするが、舌は強く締め付けている。

“その生物”は和磨を投げ飛ばし、その際和磨は背中を思いきり強く打った。

「が…」

激痛で叫ぶこともできず、和磨はそのまま地に伏した。

「和磨、大丈夫か！？」

亮太が和磨に気を取られていると、ライズドッグが亮太に飛び掛ってきた。飛び掛られた勢いで亮太はそのまま倒れてしまう。

「まずい、亮太も」

和司は三人とも動けなくなったことに絶望した。

“その生物”はゆっくりと和磨の方に近づいてくる。

「くそっ、早く動けや和磨」
和司の叫びは空しく響くだけだった。

「どうだ、最新作“マイラント”の力は」
得一はモニターの画像を見て不敵に笑った。

一方、康太達は廊下を未だ移動していた。
「得一はどこ行きやがった」
尚人が不満そうに愚痴をこぼす。

「逃げ足が速いな、全く」
康太も不平を言った。あの短時間で逃げ切るとは流石の逃げ足の速さといったところか。

和司達は無事なのだろうか
康太は二つのことに悩んだ。

「ずっと一本道なのは何か意図があるのか？」
健斗は疑問を言った。

「それはね、得一のいる部屋に直通してるからだよ」
突然聞き覚えのある声がしたと同時に、銃声が響き渡り銃弾は包帯をまいた康太の左腕を掠めた。

康太は痛みでその場にしゃがみこんだ。

「リヨスケ：やっぱり黒だったか」
康太が歯を噛み締めながら言う。

「ここから先には行かせない」

リヨスケは弾を込めなおし、銃を構えた。

「…ここは俺が引き受ける」

健斗が小さな声で呟いた。

「え？」

康太が聞き返す。

「尚人、康太を連れて先へ行ってくれ」

健斗は尚人に指示を出した。

「なんだかわからないけど先へは行かせない」

リヨスケが引き金に指をかけた瞬間、健斗はとっさに前へ出てリヨスケの銃を持った右腕を蹴り上げた。

銃口は上を向き、天井に向けて発砲された。

「いいから早く行け！」

健斗は大声を張り上げ、尚人と康太をせかした。

「お前はどうするんだよ」

尚人が康太の肩を担ぎながら聞く。

「後で必ず追いつく」

「わかった」

尚人は康太と共に先へ進んでいった。

康太の心配事は一つ増えた。

二十一話：死なせない

「お前には失望したよ、リヨスケ」

「止むを得なかった、健斗」

健斗は未だリヨスケと睨み合っていた。

こいつがこうちゃんを殺した。その事実が許せなかった。

「そこをどいてもらおうか」

リヨスケがデザートイーグルを健斗へ向けた。

「ここはどかねえ」

健斗は断固拒否した。これ以上殺されてたまるか。

「そうか……」

リヨスケが引き金を引き、発砲した。健斗は素早く身を翻すと同時にトンファーを取り出し、デザートイーグルを叩き落とした。

手から滑り落ちたデザートイーグルを健斗はすぐさま蹴り飛ばす。

「これで銃は握れまい」

リヨスケの右手は痺れて感覚が無かった。

「なら、左手で相手をしよう」

リヨスケは服の袖から警棒を一本取り出し構えた。

健斗は確信した。

リヨスケが持っている警棒はこうちゃんが身につけていたものであると。

「これは剛一郎のだったか」

リヨスケはこうちゃんの本名を口にだした。

「腕一本で俺を止められると？」

「二年間、戦闘訓練を積んできたんだ」

健斗は二本のトンファーで攻撃を仕掛けた。

「あ、危ねえ…」

亮太は今すぐにも喉もとに噛み付いてきそうなライズドッグを押さえていた。

ライズドッグは口を大きく開け、それを亮太がなんとか止めている状況であった。

「亮太ー無事か？」

和司が安否を聞く。自分もイーターの舌に巻きつかれて身動きが取れない状況にある。しかし舌で拘束しているだけで、命に別状は無さそうだ。唾液が気持ち悪いが。

それよりも今は返事のない和磨の心配をするべきだった。“あの生物”は着実に和磨に近づいてきている。

突如、放送機器の電源が入る音がした。

「どうだ、“マイラント”の強さは？」

得一の声が放送から流れてきた。マイラントって言うのか。この趣味悪い生物の名前は。

「おい、早く起きろや和磨」

次第に焦りは大きくなっていく。未だ和磨から返事はない。亮太もライズドッグを押さえるのがせいっぱいで和磨の救出には迎えそうにない。ライズドッグの気を逸らせればいけるか？

和司はポケットになんとか手を伸ばそうとしたが無理だった。舌の締めつけが強すぎる。

作戦を変えよう

和司は拘束が緩い足を使おうとした。足はまだ動かせる。

振り子のように足を振って、床に落ちている銃を蹴った。銃は少し地面を離れドスッと音がした。

その音にライズドッグは気を取られ、注意を逸らした。

「今だ！」

和司の掛け声と共に亮太は上に乗るかかったライズドッグを蹴り飛ばし退けた。

立ち上がった亮太はさっき床に落としたベレッタM92を拾い上げ、

蹴られたライスドッグもすぐに立ち上がり、背後から亮太に襲い掛かった。

「亮太後ろ！」

「わかってる！」

亮太は後ろを振り向かず銃だけを後ろに向けた。銃口はライスドッグの口の中に向けられ、弾丸が解き放たれる。発射された弾丸はライスドッグの脳天をぶち抜き、米が噴出す。そのまま銃を前方に向け、イーターの舌べろに向けて発砲した。銃弾は舌に命中し、和司は舌の拘束から開放された。

「サンキュー、亮太」

和司は纏わり付いていた舌を引き剥がし、舌が千切れたイーターの顔面に蹴りをお見舞いした。ここの特殊部隊の靴は鉄靴だ。

イーターの顔面が吹き飛び、辺りに米が散らばる。

「和磨の救出を！」

マイラントは腕を振り上げ、爪で和磨を串刺しにしようとしていた。和司に言われたとおり、亮太はマイラントの腕に発砲する。銃弾はマイラントの爪に命中し、爪は砕け散る。

和司はマイラントの懷に飛び込み、倒れている和磨の肩を持ち上げ救出した。

「和磨、意識はあるか？」

「あ…ああ」

反応はあった。しかし、ダメージは大きそうだ。

亮太は引き続きマイラントに向けて発砲していた。だが銃弾を受けなくてもびくとしなかった。

「まずい、弾が切れる」

亮太が弾込めする隙をマイラントは逃さなかった。すぐに間合いを詰めてくる。

「今度は俺が助けられないとな」

和磨が立ち上がり、マイラントへ立ち向かっていく。和磨はマイラントの脚に体当たりをした。

不意打ちに対処できなかったマイラントはその場に膝をついた。
和磨はすぐにマイラントから離れ、拳を構えた。

「動けるの？」

弾込めを終えた亮太が聞く。

「背中を攻撃されなきゃな」

和磨が答える。

「邪魔はいなくなった、これであの化け物と相手ができる」
和司は銃を拾い上げ、マイラントは立ち上がった。

第二十二話：最高傑作の欠点

和司たちとマイラントの距離は三メートルあるかないか。

間合いを詰めようと思えばすぐに詰められる距離だ。互いに牽制し合っている。

「ここは俺がいくから、二人とも下がってくれ」

和磨の言うとおり和司と亮太は一歩さがった。

「覚悟！」

和磨は拳を握りしめ一歩走り出すと、マイラントも一歩踏み出した。マイラントが伸ばした腕を和磨は避け、腹筋に肘打ちを一発入れた。マイラントは一瞬よろめくがすぐに踏みとどまり、蹴りを和磨にお見舞いした。和磨は放たれた蹴りを拳で防いだ。腕に衝撃がビリビリ走る。

得一が最高傑作と言うだけあって能力も高い。コメシスよりかなり強い。だが、所詮はライスヒューマンの強化系だ。頭を破壊すれば死ぬ。

ならば取る行動は一つ。頭を破壊することだ。

和磨は頭を狙うため壁を蹴って、上空から攻める。放った蹴りはコメシスの頭に命中するが、脚にきたダメージの方が大きかった。

「っ痛」

爪先を押さえてその場にうずくまる和磨。その隙をマイラントが見逃すはずが無かった。

「亮太、拳銃でマイラントの頭を狙え！」

「お、おう」

亮太は指示通り、マイラントの頭向けて発砲する。銃弾は頭に当たると同時に、跳ね返り兆弾した。

「危ね」

兆弾した弾を亮太は避ける。

マイラントは狙いを亮太に切り替えた。

「亮太、拳銃じゃ歯が立たないから俺にまかせろ」

和司は亮太の前に出て、モスバークM590の銃口をマイラントに向けて引き金を引いた。散弾はマイラントの胸に命中するが、マイラントの勢いは止まらない。

「銃口が跳ね上がってずれた！　これだから使い慣れない武器はよお！」

銃弾を装填し直し再びマイラントを狙う和司。マイラントは鋭い爪で和司の五体を引き裂こうとする。

とっさに和司は銃身を盾にしてマイラントの攻撃を防いだ。

「どんな馬鹿力だよ」

衝撃で和司はモスバークM590を落としてしまう。丸腰の和司にマイラントは蹴りを入れようとする。

「くそっ、防げ……」

終わりを和司が覚悟した時だった。体重二百キロはあるようなマイラントの巨体が倒れたのだ。

和磨が痛みから復帰しマイラントの足を払ったのだった。

「和司、鉄靴を貸してくれ」

「ああ」

和司は鉄靴を脱いで和磨に渡した。和磨が靴紐を結び終わるくらいにマイラントは立ち上がった。

「ほんじゃ、再びいくぜ」

和磨はマイラントの腹にナックルの連打を浴びせる。今まで攻撃をものとしなかったマイラントに少し効き始めている。マイラントが腕を振り上げるのを見るやいなや、マイラントの背後に素早く回りラリアットをかました。和磨の渾身の一撃も大ダメージには至らない。

マイラントは振り返り、和磨の背中目掛けて再び腕を振り上げた。

「背中は勘弁よ」

振り下ろされた腕を和磨は身を翻して避けた。

「誰が弱点を曝け出しますか……」

言葉が途中で詰まった。マイラントは和磨の腹を蹴り上げ、和磨は吹っ飛んだ。

「今のであばらの数本は逝ったぞ…」

流石にあばらが折れては立ち直るのが難しい。ゆっくりとマイラントは和磨に近づく。

見かねた和司はモスバーグM590を拾い上げマイラントに立ち向かって行った。

「仲間に手え出すんじゃないねえ！」

トリガーを力強くひき、顔面に命中した。

顔面に外傷は無いものの、マイラントは膝を付いた。

「……なんでダメージが効いたんだ？」

負傷した腹を押さえながら和磨が呟く。なぜ今までの攻撃にびくともしなかったマイラントが膝を付いたんだ。

「体内だ…」

亮太が呟く。

「亮太今何て？」

和司が聞きなおす。

「体内だ。身体の外は頑丈でも、体内はおそらく生身なんだ。外からの衝撃で頭を破壊するのは不可能だけど中からならできる」

亮太の意見は非常に的を射ていた。

「和司、手榴弾ある？」

「あ、ああ二つあるな」

和司はポケットをあさって手榴弾を二つ取り出した。和司が今身に着けているものは特殊部隊員から盗ったものだ。

「これをマイラントの口中へ入れれば…」

「ああ、多分倒せる」

和司は手榴弾を握りしめ、立ち上がるマイラントへ向かっていった。

第二十三話…チェックメイト

和磨の意識は朦朧としていた。

マイラントに蹴られた跡が痛む。あばらの何本かは折れているのが感覚でわかった。

目の前では和司が手榴弾を持ってマイラントと対峙しているのがぼんやりと見える。

もう意識を保ってるのがやっとだ。

「少し、お暇をいたただくぜ……」

和磨はそのまま意識が飛んだ。

マイラントの弱点が体内というのはわかった。しかし、マイラントの体内を攻撃するには口内を狙うしかない。口が開いた瞬間、この手榴弾を入れればよい。

「手榴弾を口の中に入れる」

「それって…極限まで奴に近づくってこと？」

「そういうことだ」

亮太の返答が来る前に和司はマイラントに立ち向かって行った。

あの重い蹴りを一発でも食らえば立ち直れないだろうということは和司はわかっていた。

肉弾戦においては屈指の強さを誇る和磨が立ち直れないのだから。

「なるべく和磨から遠ざけて闘うか」

和磨がまだ死んでないのはマイラントもわかっていた。隙有らば、和磨に止めを刺すだろう。

マイラントの腕の振り下ろしを和司は避ける。一発でも当たれば終わりだ。

奴の口元を見るが、まだ息は切れていない。

とにかく息を切らして、常時口を開けっ放しにさせればその時に手

榴弾をお見舞いできる。

「おらおら、こっちだ」

和司はマイラントを挑発させた。マイラントは挑発に乗って攻撃してきた。

「やはりそうだ」

怒りで攻撃が大振りになってきている。大振りになれば攻撃は避け易くなる。放たれる蹴りも楽に軌道を見切ることができる。

「和司、援護するぞ」

亮太が拳銃をマイラントに向けようとしていた。

「やめろ、撃つな！」

和司は亮太の援護を拒否した。的が分散すると攻撃は避けにくくなる。

「それより、和磨の手当てを頼む」

「わかった」

亮太には和磨の手当てに専念してもらうことにした。早く応急処置をしないと取り返しがつかなくなるかもしれない。あばらが何本か折れているんだ。今までの旅ではそんな重症は無かった。

体感では随分長いこと逃げ回っているように感じた。息も少し切れてきた。しかし、マイラントの息が切れてくる様子は無い。得一が最高傑作と言っただけはあるか。

「っ痛」

考えるのに夢中でマイラントの爪が襲ってきたことに気が付かなかった。致命傷は避けているが、服の袖が切り裂かれている。これは特殊部隊が着るような服だぞ。そこらのユニクロとは違うんだぞ。

「こうなったら一か八かだ」

和司は四隅の壁に向かって走り出した。マイラントもそれを追いかける。

「はあああ！」

和司は思い切り駆け、壁を蹴った。和司は宙を舞い、マイラントの肩に着地して手榴弾のピンを抜いた。

「これでくたばりやがれ！」

ピンの抜かれた手榴弾をマイラントの口内に思い切り押し込む。すぐに和司はマイラントの肩から降りる。マイラントは口の中にある異物を取り出そうとして手を口に持っていた。

「チェックメイトだ」

和司がそう呟くと同時に口内の手榴弾が爆発した。密閉空間での爆発は想像以上に強く、銃弾をも跳ね返す皮膚を炎は貫き、辺りに焦げた米粒が落ちてくる。内側から核となる梅干を破壊されたように、腕がだらりと下がった。そして、そのまま和司の横にマイラントは倒れた。

「ついに倒したか」

和司の吐息は少し落ち着いていた。

第二十四話：明かされた真実

「どうした、もう終わりか？」

リヨスケが嘲ながら、健斗を見下す。

健斗は両手に持っていたトンファアを床に落としてしまった。

相手は片手しか使っていない。警棒一本でこっちの攻撃を全て防ぎやがった。伊達に二年間戦闘訓練を積んでるだけあるか。

「こっちはまだ片手しか使っていないぞ」

リヨスケの挑発はまだ続く。リヨスケを見くびっていた。二年前は臆病で逃げ腰だったのに。

「お前をどうしようか。ここで殺すのは造作も無いことだが、殺したら得一が怒るしな」

どうやら俺は殺されないらしい。だが、実験台として得一に提供される。ろくな人生は歩めないがな。

「なんで得一に協力している？」

リヨスケに聞いた。少なくとも二年前は得一と闘う意思があったはずだ。

「約束されたからだよ」

「え？」

「二年前、タイで俺達は『Eater EX-06』に襲われ、そこでチームは壊滅した。他のやつらが意識があったのかもよくわからない。自分の意識を保つのが精一杯だったからな」

初めて聞いた。二年前の出来事についてはリヨスケは話してくれなかったからな。

「それで？」

「得一が話を持ちかけてきたんだ。『命は助けてやる。ただし、以後俺の指示に従え』と」

リヨスケは話を続ける。

「得一からの指示は『残りの三年三組の連中を連れて来い』と。そ

うすれば、得一の死後残った財産の相続権をくれてやるとな」

この野郎は金で釣られたのか。怒りで手が震えだす。

「欲に目がくらんだのか」

「あの時、俺と同じ状況だったなら誰だって指示に従うさ」

リヨスケは床に落ちている拳銃を拾い上げた。

「さ、早く得一の所に来るんだ。まだノルマが残ってる」

リヨスケは銃口を俺に向ける。まだ手のしびれは残っているが、そこまでひどくはない。反撃はできる。

「わかった」

と返事をする。

「なんだ随分大人しくな…」

とリヨスケが言いかけた時、俺は頭突きをリヨスケの腹に目掛けてかました。

「が…」

リヨスケが苦しげに腹の痛みを抑えている。すぐに肘打ちを拳銃を持っている手にお見舞いする。

「俺が指示に素直に従うとでも？」

すぐに俺はトンファアを拾いあげ、蹴りをリヨスケの顎に食らわした。口から血が少し垂れている。

「てめえ」

リヨスケは怒りで警棒を二本、腰から取り出した。

「はぁ！」

正拳突きを放ったが、警棒で防がれた。

「遂に二本取り出したか」

リヨスケの放っている殺気は凄まじかった。ここまで怒っているのは初めてだ。

「骨の一本や二本折れても知らねえぞ」

「望むところだ」

リヨスケは右の警棒を振り下ろしてきた。トンファアで攻撃を防ぐが、もう一方の警棒が襲い来る。

すかさず、もう一方も防ぐ。

「どうした防戦一方か？」

リヨスケが蹴りを放つのと同時にこちらも蹴りを放つ。

「まさか」

蹴りも無事防げたが、それにしてはこちらのダメージが大きい気がする。

「お前の靴は鉄靴か？」

「よく見抜けたな」

リヨスケは警棒の乱舞を続ける。一撃一撃が重過ぎる。このままでは防戦一方だ。

警棒の振り上げでガードが開けられた。

「しまった…」

気が付いたときにはリヨスケの重い蹴りが腹に命中していた。

よろめき、膝を付いた。今のであばらが何本か逝ったな。

「不意打ち一発当てただけで粹がるなよ」

本気時のリヨスケを俺はなめていた。

第二十五話…仲間殺し

「このまま得一に差し出すのもいいけど、もっと苦しめてからにしよう」

リヨスケがこっちに近づいてくる。頭がガンガンするのは血を流しすぎてるからだろうか。

全身の力を振り絞って立ち上がる。立ち上がったのはいいがフラフラする。こんな状況でやり合って勝ち目があるかどうかはわからない。

「まだ立ち上がるのか」

リヨスケは警棒を構えた。

「まだ終わっちゃいねえ」

トンファーを構えると、リヨスケは警棒を振り、それをトンファーで防ぐ。また防戦一方だ。

「そろそろ耐え忍ぶ闘いは辞めたらどうだ？」

リヨスケが挑発してくる。

「そんならお望み道理…」

足を上げかけた時だった。耐えられない痛みが腹を襲ったのだ。

「が…」

思わず膝を付く。あばらが折れてるのは流石に効く。

「どうした？ さっきと言ってることが違うぞ」

リヨスケの警棒の殴打が腹に響く。よりによって弱点を狙ってくるか。

そのまま地面に倒れる。リヨスケは見下したような目でこっちを見ている。

「そろそろ終わりにしようか」

リヨスケが片足を上げた瞬間を狙って、軸足となっている足を振り払った。

「この」

バランスを崩したりリヨスケは倒れ、俺は立ち上がった。崩れ落ちるリヨスケの顔面に正拳を食らわし、リヨスケはダウンした。

「そろそろ終わりにしようか」

リヨスケが言ったことを鸚鵡返しに返す。

リヨスケはすぐに立ち上がる。中々タフだな。こっちはあと一発でも食らえばノックアウトなのに。

「実験室送りにしてやる」

リヨスケは二本の警棒を同時に振り下ろした。

脇が空いた今だ。

俺はトンファーを振り回し、脇に命中させた。

「ぐ…」

今度こそ効いたらしく、痛みでリヨスケの顔が引きつったのがわかった。

ここで引いたらおしまいだ。

俺は全身全霊を込めてアッパーカットをリヨスケの顎に命中させた。殴った時の痛みがこちらにも跳ね返ってくる。

リヨスケは一瞬ふらついたが持ち堪えた。

「おのれ」

全身全霊のアッパーカットも相手にはあまり効かなかった。リヨスケの警棒の突きが俺のみぞおちに命中し、ノックアウトされた。

「よくもここまでやってくれたな、生かしちやおかねえぞ」

リヨスケが俺の身体に覆いかぶさり、右腕を押さえられた。

「腰の拳銃も右腕が抑えられては取り出せねえか」

リヨスケは目を俺の腰のほうに向けると、突然青ざめた顔になっているのがわかった。

「まさか、お前」

俺は左腰に付けた拳銃を取り出し、銃口を向けた。

「形勢逆転だな」

トリガーを引くと、弾丸はリヨスケの右肩を貫いた。

「があああああ！」

取り押さえられていた右腕が自由になった。右腕を拳銃に添える。

「仲間殺しの罪は許してはいない」

弾丸は左脚、右脚の順に貫通しリヨスケはその場に倒れた。

俺はリヨスケを見下ろした。既に虫の息だ。

「止めを刺せ」

リヨスケの口からその言葉は出た。

「なんでだ？」

「どの道、俺はもう役立たずだ。得一は俺を始末する。それに」

「それに？」

「俺はこうちゃんを殺してしまった」

リヨスケの目が潤んでいるのがわかった。

「あの状況はああするしかなかった。得一に忠誠を誓っているのを示すためにな。でも、仲間殺しは仲間殺しだ。クラスメートを殺した。人の人生を勝手に終わらせた俺が好きなタイミングで死ぬるわけがない」

リヨスケの言ってることは至極全うだった。

「その通りだ。俺はこの場ですぐに止めを刺したい」

「なら刺せ」

「でもー」

「でも？」

リヨスケが聞き返した。

「康太がこの場にいたら、すぐ殺そうとは思わないだろう。出るころに出てもらうぞ」

俺はリヨスケの身体を持ち上げ、得一の部屋へ向かった。

第二十六話…『Rウイルス』誕生

今、康太は机を挟んで得一の前にいる。

机にはコーヒークップが二つあり、湯気が立ち上っている。

「飲まないのか？」

得一が聞いてくる。

「飲む気分じゃない」

康太はそう答えた。毒が入ってるかもしれないコーヒーなんて飲めるか。

部屋には自分と得一の二人しかない。尚人はこの部屋に入る前に別行動させた。二人だと警戒される。

「なんで『Rウイルス』なんて造ったのか？」

これを機会に『Rウイルス』のことを聞き出そう。この荒廃した世界を更生させる鍵があるかもしれない。

「あれは偶然だった」

「偶然？」

鸚鵡返しをする。

「自宅で趣味として実験をやってたら偶然生まれた」

自宅で細菌実験だと？ しかも趣味として。正常な人間ではなさうだな。

「まずは動物実験をした。幾度無くウイルスをマウスに注射したが発症したのは五百匹に一、二匹だった」

話の続きを黙って聞く。

「何が駄目なのか？ 百パーセント発症させるためには何が必要か？ 必死に考えたよ」

「その必要なのは何だった？」

「星野だよ」

背筋がぞくっとした。自分の趣味の実験を成功させる為に己の生徒の命をも弄ぶ。真性のマッドサイエンティストだったか。

「それで星野を…」

言いかけた時だった。

「いや、それは少し後だ。まずは星野の髪の毛の毛根に含まれているDNAを使った。結果は成功だった。

飛躍的な発症率の高さになったよ。でもまだ百パーセントじゃなかった」

だから星野丸ごとを拉致したのか。

「この成功をきっかけに実験室を拡大することにした。新潟や中学校の古墳の下に造ったんだよ。全財産を投げ打ってな」

一教師の趣味から世界を巻き込む大犯罪に発展したのか。

「でも、結局は失敗した！研究所からウイルスが漏れ出し、日本だけでなく世界までも人の住めない土地にしてしまった！」
と、思わず康太は叫んだ。

「失敗じゃない！」

得一は机を思い切り叩いた。コーヒーの水面が振動で揺れる。

「康太の言う通り、『Rウイルス』によって世界は滅んでしまった。でもこれによって平和は訪れた！世界中の権力者は死滅し、人類は核の恐怖に怯えることはなくなった」

そんなのは間違っている。

「それは自身の失敗を正当化する為の言い訳に過ぎない！」

再び康太は叫ぶ。

「お前らなら鍵がある。誰一人感染することなく、二年間ライスヒューマンがうろつく世界を旅できた。身体に抗体の一つくらいできている筈だ」

「だから執拗に俺達を狙ったのか…」

「そうさ。更に強いライスヒューマンの作成は二の次にすぎない。まずはこの荒廃した世界を再生させる。その為にはお前らが犠牲になるんだな」

得一は胸ポケットから拳銃を取り出した。まずい、こちらは左腕が負傷している。そこを狙われると非常にまずい。

「世界平和の礎になれ！」

得一は発砲した。条件反射ですぐに避ける。まさか攻撃してくるとはな。お茶を出して話し合いじゃなかったのかよ。

もう一発弾丸は飛んでくる。これも避けることができた。その際、弾丸がコーヒーカップに命中し割れた。

「話し合いする気なんて最初から無かったんだな」
こちら拳銃を取り出す。

第二十七話：ジョーカー

康太が得一と対峙している時、部屋の扉が開いた。そこには満身創痍の健斗と足を引きずっているリヨスケの姿があった。

「扉の前にはS Pが二人いた筈だが？」

得一は言った。

「S P？ なんのことだか？」

健斗の足元には黒服を着た男二人が倒れていた。

「リヨスケ……その様子だとお前負けたのか」

得一は拳銃の照準をリヨスケの額に合わせ、引き金を引いた。銃弾はリヨスケの額を貫き、肩からその身体はずり落ちた。

「こう簡単に負けてもらっては俺の跡継ぎなんてできないよなあ」
照準を今度は健斗に向けた。健斗はもう闘う体力なんて残ってないだろう。このままだと犠牲者がもう一人増える。

「自分の跡継ぎ候補をこうも簡単に殺せるのか」

康太は得一に疑問を投げかけた。

「ああそうさ。候補なんて探せばいくらでもいるからな」

やっぱりこいつ性根が腐ってやがる。

「健斗のその様子を見ると簡単に生け捕りできそうだな。ほっといてもいいか」

健斗に手を掛けることは防げた。ここは気まぐれを喜ぶべきか。現に健斗は息が上がっている。立っているのが精一杯だろう。

「まずはお前からだ」

得一は康太に向けて発砲する。康太は飛び込み前転で弾を避けるが、左腕が負傷しているせいでうまく前転ができない。回避も満足にできないか。

「こんな狭い室内で逃げ回ってどうするつもりだ？」

得一は発砲を続ける。ここで俺が倒れたら、あいつは間違いなく健

斗を連れて行く。そうはさせない。

「この」

得一に向けて発砲するが当たらない。片手撃ちでは反動で軌道がずれる。右手に来るダメージも中々なものだ。

「どこを狙ってるんだ？ やはり二年間の旅は辛かったか？」

弾を込めて得一は発砲を続ける。

直接倒すのは無理だ。弾がもったいない。

「どうすれば……」

康太は呟く。ふと天井を見ると豪華なシャンデリアが飾ってあるのが目に入った。

これだ。

康太は天井に向けて銃弾を発射した。

「疲労で遂にまともに狙いをつけられなくなったか？」

得一が挑発をしてくるが、康太はそんな戯言には耳を貸さない。銃弾はシャンデリアを吊るしている鎖を掠め取った。万有引力の法則でシャンデリアは下に落ちる。

「小賢しい！」

空気が切れる音を感じ取ったのか、得一はとっさに後ろに下がって落下物から身を守った。

「おーおー、流石だな康太。機転が効く。この部屋にはシャンデリアはお前が落とした奴一つだけだ。ここで早くもジョーカーを使うとはな！」

安心して得一は銃口を康太に向ける。

「それはジョーカーじゃない」

康太が呟く。

「負け惜しみを言っても無駄だ」

得一が引き金に指を掛けた時だった。天井の排気口の蓋が緩み、落下したのだ。

「まさか？」

得一は銃口を康太から排気口の方へ向けた。

そうさ、シャンデリアを落とすのは切り札じゃない。シャンデリアが邪魔で排気口から出てこれなかったのだ。尚人がな。

この至近距離なら当たる。

「余所見を……」

康太が言いかけた時である。

「するとでも思ったか？」

得一は懷からもう一つ拳銃を取り出した。こいつ二丁撃ちもできるのか。

「全く舐められたもんだ。そんなたかが十代のガキに俺を殺せるとでも思ったか。滑稽だな」

得一は拳銃を康太の額に突きつけた。もう無理だ。今度こそ終わるだ。

「尚人が出てきた瞬間、鉛はお前の額を打ち抜く。尚人の始末はその後だ」

「もう遅い」

康太がぼそっと呟く。

「そろそろ年貢の納め時だ」

得一のその声はすぐに悲鳴に変わった。

「ぎゃあああああ！」

尚人のダガーが得一の左腕を貫く。激痛で得一は拳銃を落とす。落とした拳銃をすぐさま尚人は拾い上げた。

「言っただろ。遅いと」

康太の表情には笑みが浮かんでいた。

尚人は得一に拳銃を突きつけた。

「これからの言うとおりに従え」

尚人の一言には重みがあった。

得一は両手を挙げたまま一步一步後ずさりしていく。尚人は得一を本棚の前に追い込んだ。

「はい。大人しく従います」

得一はその時、本棚の一冊の本に手を掛けた。

すると、眩い光が発生した。

「くそ閃光弾か」

尚人は眩しさに目を腕で覆い、康太もとっさに目を瞑った。

「じゃ、あばよ」

得一はそう言い残した。

目が元に戻ってきた。部屋には健斗、尚人、そしてリョスケの亡骸はあるが得一の姿は見当たらなかった。

「あの野郎が消えた」

尚人は辺りを探している。

「本棚の本がスイッチだったんだ。追い込んだのにこれじゃ振り出しに戻っちまった」

尚人は地団駄を踏んでいる。

こここの部屋の通常出入口は一つだけだ。と、なるとこの部屋のどこかに隠し扉があるってことだ。

「尚人、本棚を動かせるか？」

康太は尚人に頼んだ。

「あ？ ああ」

尚人は本棚をずらした。すると隠し通路があるのがわかった。

「この先に得一はいるのか？」

「だろうな。俺は無理だ。尚人、行ってくれ」

康太は目を閉じ、尚人は走り出した。

第二十八話…チェックメイト

得一は長い隠し通路を歩いていった。
悔っていた。

まさか、隠し通路を使わせるはめになろうとは。だが、大丈夫だ。
あの面子で追って来そうなのは尚人のみ。健斗は立っているのがや
つとだし、康太も満身創痍だ。残りの和司、亮太、和磨は『マイラ
ント』が始末しただろう。このエルバ島の本部は捨てて、ウクライ
ナの支部へ向かうとしよう。その際、ここにある証拠は一切合財消
滅させよう。

「くそが」

得一はそう呟き、左腕に刺さったダガーを抜いた。カラインとダガ
ーが落ちる音が通路に響き渡る。

「この通路を渡った先に脱出用のヘリがあるから、そこまでだ」
ふらついた足取りで通路を進んだ。

尚人も隠し通路を進んでいた。

さっきカラインと金属が落ちる音がした。と、いうことは得一はそ
んなに遠くへ行っていないということだ。急いで向かわないと。

あの悪魔のことだ。この本部を捨て去って海外の支部へ向かうだろ
う。飛び立たれたら終わりだ。それまでに肩を付けよう。

「早く追わないと」

尚人は走り出していった。

得一は気づき始めていた。

足音がどんどん大きくなっている。

だがもう遅い。ヘリポートは既に目と鼻の先だ。

「おい、俺だ。得一だ。出発準備をしろ」

得一はヘリのパイロットに合図を送ると、すぐにヘリのエンジンがかかり始めローターが回り始めた。

「もうここに思い残すことは無い」

ヘリに得一は乗った。

それより少し遅れて尚人がヘリポートに辿り着いたのがコックピットから見えた。

「遅かったな！ ではさらばだ！」

ヘリのエンジン音が鳴る中、得一が尚人に向かって大声を張り上げた。

しかし、中々ヘリが出発しない。不調でもあるのか。

「おい、なんで出発しない」

得一がパイロットに聞く。

「決まってるだろ」

パイロットは答え、サングラスを外した。

「おのれ……」

そこにいたのはパイロットではない。パイロットに変装した和司だったのだ。

「どうやって私の最高傑作を」

得一は怒りで手が震えている。

「なんとか倒したさ。三人がかりでな」

和司が笑うと、得一は拳銃を内側の胸ポケットから取り出した。

しかし、取り出した銃はすぐに手から離れた。自分の右腕を見ると出血しているのがわかった。

「もうこれで両手を封じた」

和司は刺したボールペンを引き抜いてそう言った。得一は力が抜けて崩れ落ちるのを感じた。

「遂にチェックメイトか」

得一はすでに悟っていた。

「その内、負傷者の救護が済んだら亮太達もここに来る。王手だ」
和司は得一に言い聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0952n/>

ライス・ハザード?～THE LASTWAR～

2011年12月24日12時55分発行